

たいまにん

どくいも

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

対魔忍の二次もつと増えろ

# 目次

ようこそ！東京キングダムへ！

ぷろろーぐ | 1

とうきょうきんぐだむ | 8

のまど | 17

せんとう | 26

ちようきよう | 37

ていじゆう | 59

けいえい | 68

おつかい | 76

れーす | 84

ようこそ！東京キングダムへ！  
ぷろろーぐ

宝の持ち腐れという言葉は知っているだろうか？

優れた才や道具があるのにそれを使おうとしないこと。

そして、その言葉は自分によく当てはまった。

確かに自分は無数の優れた才能や能力を持っていた。

自分には前世があり、一度死んでこの世界に生まれ変わる時に神から直接色々もらったのだ。

「好きなだけ持つて行っていいよ」というとても無造作な感じで。

だから、自分は生まれながらにこの世界に住む多くの持たざる者と比べて恵まれていることはわかっていた。

……しかし、自分はそれらを使つて何かしようという気にはなれなかった。

理由は簡単だ。

だつて自分が生まれたのはごく普通の日本だったからだ。

天性の肉体？ああ、風邪薬いらずだ。

スタンド能力？両手がふさがつているときに便利だね

無敵の古武術！おう！もし突然暴漢に襲われても安心だな！

……とまあ、おおむねこんな感じである。

別に能力なんてものはあれば便利だが、なくても生きていけるのである。

もともと自分に英雄願望もないし、仮にあつたとしてもそのため能力を使い、また研磨するほどの情熱はない。

むしろ下手に能力なんて使うと、世間をにぎわせ一気に異物扱いになつてしまうのが目に見えている。

さらに言えば、自分がもらった能力というのは、その多くは鍛えなきゃ使いこなせるようにならないものばかり。

その上、適当にもらい過ぎたせいでそもそも自分が何の能力をどのくらい持つているかなんてはつきりとは覚えていないのだ。

けどまあこれでいいのだ。

チート転生なんて、ゲームの2周目をやる気持ちでほどほどに楽しむのが一番だ。

できるだけ家族を悲しませず、なおかつ周りにいる魂年齢が1周り下の同学年の青春を邪魔しないようにする。

部活や学業も勉強せずともいい点を取れるので、無理に満点を狙う必要はない。

平穏無事無病息災。

将来の夢はとくにはないけど、しいていうなら一度は世界旅行してみたい。

だから、その金を稼げるくらいにはいい仕事に就きたいなあ。

……なんて、油断していたからいけなかったのだろう。

ある日の少し夜遅くの帰り道。

突然の不審者集団からの薬&ずた袋でドン！

正直、このテトロドトキシンすら無効化するチートボディに効く薬があったことに驚きつつ、袋に包まれせつせとどこかに運ばれたのだ。

この時はまだ帰りが遅くなりそうだとか、薬が抜けるのはまだかなとかそんな楽観的なことを考えていた。

しかし、現実はずっとやばかった。

「お〜〜つくつくつく〜！これはイキのいいメスだ！

種付けし甲斐がありそうだ！」

「ま〜ぞつくつく〜！

こちらの刷り込み式魔界洗脳調教マシンの準備はできている。

空き次第、順次拉致してきた女どもを機械に入れるぞ」

「んほおおおおおおお♪♪らめえええええ♪♪

おチンポ様奴隷になっちゃううううう♪♪

対魔忍なのにiiiiiiiiii♡♡♡♡」

なんと、この世界はただの普通の現代日本ではなかったのだ。

一歩足を踏み外せば、感度3000倍に改造される。

少し裏路地へ入れれば、精液が媚薬とかいう頭おかしいオークとか言うエロゲ生物がいる。

それは町中でも油断できず、シーンさえあれば電車や駅前、はてにはテレビカメラの前という状況ですら人外とのエロイベント及びリンカーン大会がスタートする！

そんなエロダークサイバーパンク抜きゲな【対魔忍世界】だったのだ!!

「ファツキユー!!!滅びろ!!エロゲ的物質&生物どもめえええええええ!!!」

「んぎやああああああああ!!!」

「いかん、いかん、思わずやり過ぎてしまった」

というわけで、昨日までただの平凡な日本に生まれたと思ったら、実はそこは抜きゲ的エロゲ世界で更に言えば自分はその世界にTS転生してしまったとか言う、おおよそヤバイフラグを複数おったててしまった慢心系チート女学生主人公です、どうぞよろしく。

「て、てめえ……ま、まさかその力……」

おまえ、対魔忍か!!」

「そんなわけあるか、あほが」

「んぎやああああああ!!!」

人をいきなり脳筋ガバガバ国营テリヘル集団と一緒にしないでいただきたい!

そんな思いを胸にしながら、現在は拉致られた見知らぬ場所で破壊活動に奮励中。

自分の持つチートの中でも比較的、使用頻度が高くとりあえず自爆

しない程度には使いこなせる【ゴミを木に変える能力】で無双している最中だ。

「馬鹿め！隙ありいいいい!!」

張り巡らされた樹木の影からオークが飛び出してくるが、わざわざしやべりながら奇襲してくれるのだ。

遠慮なく先端を杭状にした樹木で貫かせてもらった。

当然襲ってくる連中の多くは人外であり魔族である。

が、その中には人間も存在した。

そして、こんな場所にいる連中は当然男である以上レイパーであり（何を言ってるかわからないと思うがこれがデフォルトなのだ）容赦なくこちらを性的肉体的両方の意味で襲おうとしてくる。

なので反撃をしてしまった。

そう、私は地味にこの世界に来てから初めての殺人をしてしまったわけだ。

「……けど、血を流してくれないと実感がわかねえ……」

しかしそこは流石、腐ってもサイバーパンクな世界。

今しがた自分が力加減を誤って殺してしまったレイパーは幸か不幸かサイボーグだった。

なので、胴体に穴をあけても血の1滴も流さなかった。

自分が初めて直接この手で殺人を犯してしまったというのに、まるで実感がわかないという何ともおかしい状態である。

なお、下の物までサイバーであった、おえっ！

「この、劣等種族がアアあああ!!」

「なら、チンポ突っ込むために、拉致してんじやねえええ!!」

コウモリのような羽を生やし、角と牙を生やした人型の化け物である魔族が、股間を勃起させながらこちらに向かって襲い掛かってきた。

が、勃起するのも一緒なら、ミンチにされたら死ぬのはオークも魔族も人間も一緒である。

容赦なくこの魔族も、前の奴ら同様に壁の染みにさせてもらった。全く、この世界の雄どもは誰もかれもが性欲旺盛すぎて困る。

下を見ればシヨタから手のひらサイズの魔蟲、上を見ればじじいから1000歳以上の吸血鬼まで。

ふたなりのことを考えれば、老若男女すべからず精子脳とはまさに肉食系男子の楽園である。

なお、【寝取られの対魔忍】達郎は除くとする。

「……で、結局ここはどこだよ」

粗方、自分を拉致したオーク集団を滅し終わったところで状況を整理する。

残念なことに、オークの死体と自分の能力で作った樹木が邪魔で捜索しにくい。

それでも、生き残ったアへ顔さらし中の調教済み女奴隷達に状況を尋ねるくらいなら、このごちやごちやになった部屋の書類を集めて情報整理をした方がましというものだ。

「お願い入れてええええ♡♡♡」

「どうかオーク様……私にお情けを！お情けを！」

洗脳ヘッドギアをかぶせられた無数の調教中女性の嬌声をBGMに散らされた紙やノートパソコンを復旧させる。

書類は丁寧な5ヶ国語（日本語、英語、中国語、魔界語、異界語）で書かれており、ノートPCも電脳チートでちよちよいつとロックを解除する。

……どうやらここは表世界の女性を拉致し、洗脳調教、そして娼館や好きもの魔族に格安で売りつけるといった奴隷商で生計を立てている小組織のようだ。

周りに見える無数の謎の機械や手術道具で奴隷に無数のオプションをつける親切丁寧な対応。

お客様を第一にをスローガンに運営していたとのこと。

とても素晴らしい心構えだ、それが人売りでなく、かつ自分を巻き込まなければどれだけ賛同できたことか。

「ぶひよー……おえ、ぐええええええ!!」

「……っはーなんで私はここに……いやあああああ!!」

「ちんぽお♡♡ちんぽお♡♡」



流石に洗脳装置につなぎっぱなしはかわいそうなので無数の洗脳装置につながれた女性を解放しつつ、外に出る。

嫌な予感がしつつ、地下にあったそこから、地上への階段へ足を進めていく。

そして外に出て、その目に映っていたのは……

無数の荒れ果てた道。

道を歩く魔族や人外。

無視される銃刀法。

サイボーグや機械兵といった自分の常識をはるかに超えるオーバーテクノロジー。

魔法、呪術、忍術。

そして……

「対魔忍は決して、屈しな……んほおおおお♡♡」

「ぶへへへへ！」

いくら対魔忍といえど、この超強力濃縮3000倍オークの精液媚薬の前では腰砕けみたいだな！」

「おっつくつくつく！」

よくも俺たちをたつぷり傷つけてくれたな！

野郎ども！2度と足腰が立たなくなるまでやっちまうぞ！」

突如平然と町端で行われる対魔忍と魔族の対決。

そして、決着及び、そこから始まる輪姦ショー。

その光景を誰一人として止めようとせず、むしろ混ざりに行く男達。

そして、自分は確信する

「まさか、ここがああ噂の魔都『東京キングダム』つすか……」

おぼろげな知識と先ほど手に入れた情報かそれを示す。

東京湾に建設された人工島。

かつて政府によって開発され、その後中止。

それをよからぬ集団によって目をつけられた場所。

この世界の日本の闇社会に中心にして、アジア最大の娼館都市。

その実態は人ならざる者たちが人の世に進出するための拠点の一つ。

魔界へのポータルが開き、人外化け物たちがはびこる島。

それがここ、東京キングダムなのである。

「……とりあえず、ここでも日本円使えるといいんだけど」

突然の展開と、先の見えない絶望感に打ちひしがれつつ何とか歩みを進めるのであった。

……願わくば、自身が対魔忍な目にあわされないことを祈りつつ。

とうきょうきんぐだむ

さて、衝撃の事実&強制東京キングダムへの移動から早1か月当初は馴れない地理や初見殺しのようなエロトラップの数々に困惑したが、何とか処女のまま生き残ることができた。

で、1か月も過ぎせば多少なりともここでの過ごし方や身の振る舞い方がわかってくるものだ。

例えば、エロい衣装より普通の衣装の方が目立つから襲われやすくなる。

例えば、どんな飲食店だろうとカモと認識されれば、出されたものには高確率で媚薬が混ぜられる。

例えば、東京キングダムからの脱出は1本だけある大橋を通る必要がある、それ以外からの侵入経路は素人にはお勧めできない。

などなど、基本的に嫌な情報ばかりであり、もし自分がただの脳筋チートであったならあつという間に裏路地に連れていかれ、そのまま奴隷娼婦でもなっていただろう。

でもまあ、何とか今日まで無事で生きて来られた。

残念ながらまだこの町からの脱出の目途はたっていないものの、曰くここは『金さえあれば何とかなる』の無法地帯。

なのでひとまずは金をためて、脱出できる下準備をしておく事にした。

そしてここ1か月、現在自分はあるところにて、商いをしている。

ここ東京キングダムは呪われた孤島で欲望の中心街。

そんなところで売れるものは決まっており、そして、今自分の目の前には新たな客がいる。

ヒトならざるものであり欲望の権化ともいえるオークが3体もだ。彼らは皆飢えた目つきでこちらを見て、薄汚い笑みを浮かべながらこう言い放つのであった。

「べっぴんさん。

今日もきてやったぞ！感謝しろよお？」

「つくつくつく！」

あいかわらず、うまそうな見た目しやがつて！

これは味わい尽くしがいがありそうだぜ!!」

「げっへっへ！」

こちらら金ならある！だからもしほしければたっぷりサービスしろ！

……わかるな？」

そして、オークどもはその欲望を隠そうともせず、舌舐めずりしながらそう言い放つのだ。

その豊満で醜悪、巨体な体を震わせながらこちらに近づく。

「はい！本日もおすすりめ果物詰め合わせをご購入ありがとうございます  
~~~~す♪

お代は1つ3000円です！

今回も果物の簡単な試食分を用意していますが、食べていけませんか？」

「「おおお~~~~!!よっしや~~~~!!

キーさん、今日も太っ腹~~~~!!」

そして、今日も彼らオーク労働者に「ゴミを木に変える能力」で作った無数の果実を安い値段で売りつけるのであった。

ここ東京キングダムは欲望の溜まり場、もちろん食欲に飢えてる奴らも多いのだ。

だから私はここ東京キングダムで露店果物屋を運営して生計を立てるのでした。

元手が0円経営って素晴らしいよね！

「ぶいぶい~~~~んん~~~~♪

やっぱり俺は梨が好きだな！

洋ナシじゃなくてこう、丸い奴！

シャキシヤキしてねえと、食べてる感じがしねえ！」

「サクランボっていいよな！」

食べてよし、プレゼントに良し！」

「はあ〜？」

サクランボって食いにくくねえか？

種とか、めんどくさいだろ」

「おまえ、男たるもの種ごといけや！わざわざ種を取り出して食べる  
とか、人間か！」

……でも、娼婦にサクランボプレゼントすると、サービスいいところだと舌だけでサクランボの茎でハートマークとか作ってくれるあれ。

なんかエロくていいよな」

「わかる〜〜!!」

元手が0円だからいいものの、会話を弾ませながら、試食なのに無制限で果物をぼりぼり食べていくのはやめていただきたい。

しかも肉食系オーク男子を自称してるくせに、甘いものは別腹とかいう。

乙女か！

なお、唯一残った肉食系要素は梨を皮も剥かずに丸ごと齧るワイルドさぐらいである。

ここ東京アリーナは基本無政府の世紀末地帯。

それゆえ、売るものさえあれば資格がなくてもどこでも商売を始めることができるのは素晴らしい利点といえるだろう。

まあ、それでも力無きものがいきなり商売を始めようものならそれはただの獲物と変わらない。

強盗され、拉致られ、娼婦にされ、タイマン!!されてしまうのが眼に見えている。

それでも、この町で最もポピュラーなチンピラ魔族であるオークをどうにかできる程度の実力と、ほんの少しの愛嬌さえあれば割と誰でも商売することができるということに最近気づいたのであった。

「いや〜、相変わらずすまんね、キーさん！」

俺たちの上司はかなりけちんぼで、おちおちまともに飯も食べねえんだ！」

存分に試食と言いながら、腹いっぱい果物を食べ終えたオークたちが笑顔でこうこちらに告げてくる。

「だつたら娼館行かずに我慢し、節約しろ！」

……なんて言いたいが、そのセリフをぐつと抑え我慢するのが大人の証。

魂年齢、おじいちゃんは伊達ではないのだ。

「いえいえ、ここ東京キングダムはやや食品系の物価が高いですからね。」

たくさん食べられるオークの方々には過ごしにくいのかもかもしれませんね」

「そうそう！人間界なら手軽に女を抱けるっていうから来たのに！」

いざ来てみれば、日々の仕事は安月給のただの荷物運びに、妊娠させてくれない安い娼館巡り!!

セックスできる分だけ魔界のころよりましとは言うけどさくセツクスできるだけで全てが許されるんなら、魔界の頃と変わらんつてのによ！

飯だつて魔界よりこつちの方がうまいつて聞いたけど、俺たちの口に入るのなんて、基本米連方面や魔界から流れてくるゴミみたいな食事だ！

向こうにいた頃と変わらん!!寧ろもつと悪いのが大半だ!!」

「ふっふー」

何が雇用条件で3色昼寝付きでくすすだ！

酒もねえ、肉もねえ、甘味すらねえでその次は肉体労働しろだあ？

ふざけんな！こちとら、お前らの奴隷になるために来たんじゃねくつつうの！」

オークは基本、この世界では下劣で卑怯で臆病な種族と言われている。

確かにその生態がどんな生き物でも孕ませようとして、基本的に精子脳。

3 大欲求に素直で魔族のくせに得意なことが女を犯すことと魔族の中では下の方な怪力。

それなのに、別にセックスのテクがあるわけではなく、ただ精液が媚薬なだけ。

肉棒はでかく半端な怪力なせいで多くの種族の女性をボコオさせること間違いなし。

自分本位のセックスしかできず、別にイケメンでもなければむしろその匂いが臭すぎてオーク臭として悪臭の代表にされるレベル。

魔族界のカムシやGといわれているのはわからないでもない。が、それでも割かし話せる奴であると自分は思う。

そもそも、自分は元男なのでブサメンイケメンそこまで関係なくどちらにしろ性欲がわからない。

単純ゆえに会話をしていても向こうが望むものがわかりやすい。それに基本性欲まみれなのはこの東京キングダムにおいて、どんな

魔族もオークも基本一緒だ。

おっぴろげているか隠しているかの違いしかない。なら、まだわかりやすいオークの方がましだ。

それに基本、エロゲザーメン以外の不思議能力を持ってないのもないな！

「にしても、キーさん。

こんなにやさしいんじや、魔界にいた頃も苦労しただろう？俺たちオークにこんなにやさしいんじや、ほかにはどんだけだって

感じだし！」

「だよなあ！」

きつと、キーさんはインキュバスどもに騙されて、媚薬酒を飲まされて……うっ!!」

媚薬ザーメンの無断放出はやめていただきたい。

なお、自分は今は【魔界から人間界に観光に来た魔族の女性 キー】と身分を偽っている。

なぜって？【元表世界出身の元女学生、東京キングダム脱出のため日々あがいている女性】と【魔界出身で人間界に知的興味のために訪

れた魔族」。

どっちの方がオークが犯したいと考えるだろうか？

なお、オークは基本「弱きをくじき、強きに従う」の蛮族脳とする。でもまさか、適当に頭に猫耳をつけるだけでごまかせるとは予想していなかったが。

「そうだ！キーさんどうせここを観光したいなら、俺たちのところに住んでみないか？」

「今なら、その股を開かせるだけで、ただで宿代が……」

おもむろに、店頭に置いておいたココナッツを一つ取り上げる。

その繊維層たつぷりの本来なら刃物が必要なそれを、腕力のみでごしやりと壊して見せる。

「あらあら、皆さんにココナッツミルクを上げようと思ったのですが……」

で、何か言った？」

「「いえ、なんでもありません!!」」

オークどもだけではなく、周りの露店の男たちまで思わず股間を抑えている。

うむうむ、オークはすぐ発情するが、その分力を示せばすぐに引込んでくれていい。

逃げるように駆け出すオークをしりめに次のお客さんを相手する。

「……あいかわらず、下劣なオークにもきちんに対応しているのね。

あきれるわ」

そして、もう一人のこの客の常連である【エンシエイ(HR)】さんがこの店にやってくる。

この人(魔族)は基本人嫌いのようだが、それでも自分の商品目当てでわざわざこの店にやってきてくれる。

しかも、わざと高めに設定している果物にもいい値段を払ってくれる。

ぶつちやけ上客だ。

「それよりも、件のものはちゃんと仕入れてくれた？」

「はいはい、これでよろしいですね？」



そうして差し出すは、1本の苗木。

苗木の状態を色々と観察しながら、満足いったようだ。

札束がたくさん入った封筒をポンと渡してくれた。

「どうやら、異能の類を使って作った植物のようね。」

それでもほぼ本物と変わらず、罨も仕掛けられてないようだしかわないわ。

いいわ、今回も買ってあげる」

「……あいかかわらず、鋭いことで」

「ふふふ、声を聴けば一発でわかるわよ、この子が通常でない手段で生まれたことくらい。」

でも、あなたも似た能力を持っているようだから、いつかはこの子達の声が聞こえるようになるんじゃない？」

このエンシエイさんは魔族であり、さらには「植物使役」という異能を持っている。

彼女は植物学者であり、基本的に植物の生態を調べることしか興味が無いようだ。

だから、彼女は自分が果物屋を開いてしばらくのちに、珍しく状態のいい果実を出すこの店に興味を持つようになったというわけだ。

「でも、この東京キングダムでこいつも簡単にマンゴーの苗を手に入れた事は素直に感謝するわ♪」

あ、それと次回も別の果物の苗を仕入れてくださる？」

1週間後に取りに来るから」

「はいはい、了解です。」

どんな植物の苗がお好みで？」

「そうねえ、リンゴやミカン程度ならあなた抜きでも何とか手に入るから……。」

バナナあたりをお願いできるかしら？」

エンシエイさんみたいな美人魔族が、バナナやらマンゴーやらつぶやいてるせいで周りの男性陣の股間がやばい。

なお、途中馬鹿なオークの一人がエンシエイさんに突っ込んでいったが、普通にミンチにされた。

店前で殺人、いや、殺オークがおきても誰も気に留めない当たり流石東京キングダムである。

まあ、それ以降も無数の客（主にオーク&娼婦）をさばきつつ、夕方になるまで店を続ける。

そして、この町の闇本番になる夜が始まる前にさっさと拠点へと帰るのであった。

「というわけで、今回も一泊風呂ありエッチなしでお願いしま〜す♪」

「帰れっ!!」

なお、拠点とは安全に寝泊りできるという意味でそこそこの値段の娼館にエッチなしオプションで寝泊まりしていることを言う。

相手の嬢はちゃんと頭脳チートでノンケ（レズでない）を選んでい  
るから、夜中に襲われる心配もなし。

東京キングダムゆえ、しかたないよね☆

「まあまあ、そこはほら。」

キッチンさえ貸してくれば美味しいなり寿司作ってあげるから」

「…ねえ、あなた。」

まさか、私が妖狐だからと言って本当に稲荷が好きとか信じてるわけ？」

「じゃあ嫌いなの？」

「…別に嫌いとは言っていないしー」

やや頬を染めながら、狐系の獣人魔族である彼女はそう答えた。

妖狐は油揚げが好き、キー覚えた！

とまあ、そんな風に過ごしてきて1か月。

安全な寝泊り代が高いゆえ、すぐさま脱出とはいかないが、それでも遠く無いうちにに脱出のめどは立ちそうだ。

…なんて、またまた油断していたからいけないのだろう。

「へええー！」

「ここが噂の【水蜜】ね！」

噂通り、美味しそうな桃があるじゃない！

店長さん、桃を2つほどくください♡」

「この果物さえ買って行けば、嬢が割引してくれるんだ！」

と言うわけで、取り敢えず、適当にオススメを頼む。

後、お前自身をテイクアウトできるか？」

「げっへっへー！ようやく見つけたぞ!!」

貴様が【水蜜】のキーか！

（我らがノマドが貴様に用がある！

もし逆らったら……わかるな？」

どうや少々商売がうまくいきすぎたようだ。

謎の2つ名が着いてしまった上、めんどくさい因縁がつけられたようだ。

突然のラスボス組織からの誘いに嫌な予感しか感じないのであった

## のまど

「……で、結局どうなったの?」

「青果の定期購買のお願いだった」

さて、今回は特別にエンシェイさんのお宅に招待してもらっています。

とはいっても、ここは東京キングダム内にあるエンシェイさんの仮拠点らしい。

周りがある無数の魔界産植物がここが東京キングダム内だということをやが応にも主張してくる。

「どうやら、娼館で出す食べ物のカオリティを上げるためにも、うちの果物は使いたいんだって。

露店でこまごまと出す量じゃ足りなくて、もっと大々的にうちの果物を店内で扱いたいらしい。

いままでは何とか魔界のゲートを使って、ごまかしていたらしいけどそろそろ限界らしいんだ」

「ふくん、ノマドに呼ばれたって聞いたときはどうなるかと思ったけど。」

案外、大丈夫そうね」

さて先日ついにあのラスボス所属の東京キングダム最大の組織【ノマド】に目をつけられてしまった。

が、その結果は非常に穏やかなものであった。

一応、その求められた量がトンレベルを3日に1度など個人経営者に求める量ではないが、その程度の無茶をどうにかできるのがチートの良いところ。

金さえ払ってくれるならきっちり仕事はして見せます。

「あく、でもちよつとだけ件のエドウィン・ブラックに会えるかなくと

か思ったけどね。

交渉相手は別にイングリッドでもない、名も知らぬ普通の魔族のおっさんだったよ。

内心ちよつとだけ、噂の最強吸血鬼を見てみたかったけどね。」

「何をバカなことを言ってるの。」

あいつから流れてくる情報はどれも本当にろくでもないわよ？

魔界で平和に過ごしている種族全員拉致して改造、虐殺したとか。

暇つぶしのためだけに魔界の大貴族にケンカを売って皆殺し。

わざと一番強い一人だけ残して遊んでるとか。

関わるだけで絶対ろくなことにならないわよ」

どうやら、対魔忍シリーズのラスボスこと【エドウィン・ブラック】は想像以上にヤバイ相手のようだ。

確かに【ノマド】ほどの組織が魔界にないかと言われればそんなことはない。

そして、【エドウィン・ブラック】より強い魔族が存在しないかと言われればそんなことはない。

けど、【ノマド】ほど巨大な組織を持ちつつ本人も強力で、かつどこにでもちよつかいをかけるほど動きが激しい上位魔族は【エドウィン・ブラック】しかないとのこと。

要するにキ○ガイに刃物つてことだ。

「でもま、あなたの無事祝いにこれをプレゼントするわよ」

そういつてエンシェイさんはこちらに1本の植物の苗を渡してくる。

「……………これは？」

「この間、あなたから買ったマンゴーの苗を少し品種改良してね。

より病気に強くより大きな実を実りやすく、いくつかの魔界の植物と掛け合わせてみたわ」

そう渡された植物がシュルシュルとこちらの方につたを伸ばしてくる。

そして、まるでなつくかのようにつたの先端をこちらの指に絡めてくる。

植物なのに勝手に動くのは、流石ファンタジーといったところか。自分の能力で木は無限増殖みたいなことはできるとはいえ、素直にこういうのをプレゼントしてもらえるのはうれしいものだ。

大切に育てよう。

「……にしても、やけにこの子私の体に絡んでくるね。

やっぱり、意識をもつてたりする？

なんか小動物みたいでかわいいねえ」

「ええ、その通り。

特にその子は女性の愛液が好物だから。

夜のお供にも最適よ」

手に持つ鉢を思いっきり窓に向けて投げ飛ばした。

そんなこんなでエンシェイさんと仲良くしたり、某娼婦と仲良くなったりなど脱出のために日々情報収集へ勤しむのであった。

残念ながらノマドへの情報収集はあまりうまくはいってなかったが、それでも良好な関係が続けられていると思っていた。

実際、果物の搬入は1度たりとも失敗したことないし、トラック1つ寄越さず急な大量発注などの無茶もかまされたことはあるが、どれもぬかりなく解決した。

むしろ、そういう大変な注文の後はボーナスがもらえるならこちらとしても万々歳であったのが本音だ。

そうしていい感じにお金が溜まり、東京キングダムからの脱出がか

なり現実的になった時、それは訪れた。

「くくく！ノマドに入りたくば、俺様の愛人となれ！」

俺の直属の配下となれば、権力、力、金が思いのままだ！

どうだ？悪くない話だろう？」

何を言ってるんだ、こいつは。

それはそこそこお金がたまり、東京キングダムでもそれなりの金持ちと知られるくらいになった時の出来事である。

以前からノマドには東京キングダムの外への伝手について頼んでおいたのだが、ついにそれについての目途が立ったと報告があったのだ。

なのでその夜、ほいほいとノマドへの呼び出しに応じたのだが、その結果がこれだ。

「いえいえ、私程度の女が魔族の中でも一流と呼ばれるあなた様に仕えるなど。

とてもとても恐れ多いです」

「ふはははははは！まあ確かにかつて私の一族はあのエドウィン・ブラックに仕えた高位魔族に仕えた一族。

私はその中でもエリート故、このように城一つ任されているほどの猛者！

あの対魔忍すら手玉に取る私の下につくのは確かに恐れが多いかもしれない。

だが貴様にはその体を合わせれば多少俺の目にかかるくらいの価値はある、誇るがいい！」

社交辞令ってやつだよ！察しろよ！

それにその自慢、毎度毎度思うけど親戚の親戚がすごい奴ぐらいの説明に聞こえてあんまりかつこよくないぞ！

そう言いだしたい気持ちをぐっと抑え、仕方なく話題を転換する。

「……それより、今回はここ東京キングダムの外に目立たずに出る方法があると聞いてきたわけですが……」

「ああー我が部下となれば、それなりの功績を示せばいい。」

我が組織ノマドはすでにいくつかの外への侵入ルートや国外へのルートを確立している。

そして、この俺に役に立てば、本州遠征部隊へとお前を推薦してやってもいい、悪い条件ではないだろう？」

いや、それ悪い条件だから。

そもそも魔族と偽ってはいるものの、自分は普通に人間だ。

なので、ここからは目立たずに脱出することが目的であり、別に魔界の地上侵略とかそういう目的で東京キングダムから出たいわけではないのだ。

その他いろいろなことを考えてもこいつの話に乗るメリットは微塵も感じられなかった。

「……すいませんが、今回のお話はご縁がなかったということ……」  
「貴様あ!!俺に逆らうつもりか?」

沸点低いな、おい。

「いえ、そういうわけでは……」

「なら、貴様との青果の継続購買の契約を切ってもいいのだぞ!」

「……なら、仕方ありませんね。」

いままでお世話になりました」

「は、はあ!!」

件の男魔族が困惑と驚愕の声を上げるが、こちらとしては渡りに船であった。

そもそも最近はこちらは自分の能力の使いこなしが順調に向上し



てるのだ。

おそらく、そう遠くないうちにこのたつぷり貯めたお金と自分の能力を使いこなせれば、こいつらの協力を仰がなくても脱出できそうな位には目途が十分立っている。

と、なるとむしろ脱出する際に足がつくであろうこいつらとの繋がりは逆に枷に近い。

むしろいつ契約の停止を言い出そうか迷っていた位だ。

「おい！おまえら、ちよつと相手しろ！」

自分が席を立ち帰ろうとすると、件の男魔族がぱちりと指を鳴らした。

すると、部屋の外で待機していたであろう無数の武装済みオーク達  
が部屋の中になだれ込んできた。

「……これは、一体どういうことですか？」

もしかして、脅しているつもりですか？」

「別に、恐らく十分に体が火照っているはずですからねえ！」

我が娼館が対女性サービスもしていることを教えてあげようかな  
と！

……まあ、多少手荒ではあるが、それもサービスのうちだ」

何というべたな展開。

自分の周りにいるオークたちが性欲に狂った眼をしながら、涎を振りまく。

こん棒から拳銃まで様々な武器を持ちながら、ビール瓶並みの股間の一物を見せつけるかのように勃起させている。

上の武器も下の武器も準備万端というやつか。

「げっへっへー！そういうわけだ！悪いなねーちゃん！」

「あの【水蜜】を犯せるとは……噂通り桃みたいなうまそうな体しや

がって！」

「ううう！いつも親切に世話まで焼いてくれたキー姉さんに恩を仇で返す……」

なんとという罪悪感と背徳感!!……うっ!!」

実にオーク、まさにオークである。

ただし、一番最後の奴はうちの店によく来る奴のくせにこれとか、絶対に許さん。

「いくら貴様がそこそこできるらしいといっても、これだけ数相手にはどうにもならんであろう！」

それに我慢しているようだが、この部屋に漂っている香のおかげで既に我慢の限界であろう？

いまなら、特別に土下座をすれば、オークではなく俺様が抱いてやらん事もないぞ？」

この部屋に漂うなぞの甘い香りの正体はこれか。

だが残念ながら、こちとら毒の類は効きにくいのだ。

しかし、最初部屋に入った時点でこの罠が発動していたことを考えるに、どうやら向こうは初めからまともに交渉する気はなかったようだ。

ならば、こちらも容赦をする必要がないだろう。

そろりと腕を伸ばし、目の前にある机をべきりとその一部をもぎ取る。

この自分の細腕から出たとは思えない剛力に一瞬周りが硬直する。

その隙に、その机片を握りしめ【ゴミを木に変える能力】を速やかに発動する。

「なっ！貴様抵抗を……うぼあぁ!!」

その瞬間、部屋が樹木に埋め尽くされる。

ありえない速度で成長する樹木が部屋を縦横無尽に広がり、その枝や蔦で周りにいる件の男魔族を含めたオーク共の動きを拘束する。もちろん、ただの拘束ではオークの怪力で破壊される可能性がある。のでうまく関節を決めつつ、武器を取り上げる。

自分の能力の使いこなしもなかなかのものになったようで、一瞬の最低限の能力の使用で部屋にいた全部の敵の動きを止めることができた。

さて、あとは残った件の男魔族だが……

「こ、降参だ!!おれが、俺が悪かったから!!  
ゆるしてくれ、許してくれ!!」

驚くほど変わり身が早いな、おい!

樹木に埋もれ、体を拘束された魔族の男がそう叫ぶ。

パワーはないようで、この一応はただの丈夫な木材レベルの拘束を破れていない。

「……まあ、別に命までは取らないし、ノマドとは無駄にいざこざを起こすつもりはない。

だけど、先に契約を切ったのはそちら。

ゆえに以降、互いに干渉、いいね?」

「わ、わかった!わかったから!!」

そ、それでいい!それでいいから!!」

ここで下手に追撃や恨みを買って、変な因縁をつけられるのも馬鹿馬鹿しい。

こちらとらさつさとここ東京キングダムから足を洗い、元の平穩無事な生活に戻りたいのだ。

こうして自分とノマドの関係は多数の金銭のやり取りをした後、驚くほどあっさりとは短く終わったのであった。

そのいざこざから数日後に……

「あなたが、【水蜜】の魔族、キーですね。

あなたが無数の殺人や人身売買、対魔忍の調教奴隷化及び人々への魔改造に関わっていた事実は既に把握済みです。

この七瀬舞、直々に成敗してあげましょう」

なんと、対魔忍から刺客が送られ、命が狙われるのであったとき☆

……なんでや!!!

せんとう

さて、「対魔忍」と聞けば皆さんはどのような連想をするだろうか？  
名前だけ聞くと魔と対峙する忍者でかっこよく聞こえる。  
能力だけ聞けば、魔を討つものにふさわしいと思うだろう。  
行った功績の結果だけを聞けば、国を魔から守るにふさわしい業績  
と言えなくもないかもしれない。  
しかし、実際そんな印象を持っている人は少ないであろう。  
なぜなら……

「んほおおおおお♡♡らめえええ♡♡」

「オークチンポが子宮にキスしてるのほおおおお♡♡♡」

また対魔忍殿がアへられておるぞ!!  
しかも、新米からベテランまでである。

リーダーで対魔忍の中で最強のアサギ様ならそんなことはない？  
馬鹿野郎!!そいつが一番の堕ち要因だ!!20から始まり30過ぎ  
てもなおアへ顔晒す!

レズから輪姦異種姦かわらず、穴という穴を、穴でない乳首です  
ら経験開発済み!!

その有り余る体力すべてを使って、東京キングダム中の老若男女人  
外含めすべての肉便器になったレジェンドだ!!

流石対魔忍!鍛えてるだけあって便器としての耐久度が違うぜ!!  
やっぱり対魔忍は性処理には最適だな!今日も一日即墜ち頑張る  
ぞい!

と、もちろんこれは偏見に満ちた感想であり、偏りのある意見であ  
ることは認めよう。

きつとこの世界でも、頑張つて探せば有能でアへったことのない対  
魔忍や純愛を貫く対魔忍、処女童貞なほのぼのカップルの対魔忍がい  
てもおかしくはないだろう。

……が、それでなお、自分の中の対魔忍の印象は「即墜ち2コマ」か

ら変化することはない。

なぜなら自分が初めてこの東京キングダムで出会った対魔忍はすでに自分が一瞬で殲滅できる程度の相手にニコニコアへ顔調教中だったからだ。

なお、その時はなり行きで助けたもののその対魔忍の精神が肉便器から元に戻ることはなかった。

その後も東京キングダムで過ごしていく中で見かける対魔忍はどれもこれも死んでいるか、アへってるかのどちらか。

そもそも娼館で嬢のプロフィールに平然と元対魔忍とか書いてあったりするのだ。

それでどうして、そんな対魔忍を信用できようか？

内心、ここからの脱出に対魔忍の手を借りればいいのでは？一般人の自分なら無事に接触さえできれば彼らが保護してくれ、そのまま帰ることができるのでは？

なんて期待していただけに、出会う対魔忍すべてがアへ顔晒して役に立たないという事実にかなり落胆したのはいまだ記憶に新しい。

そして今現在、この東京キングダムに来て初めてまともに会話できそうな対魔忍と遭遇できたわけだが……

「……！！くらえ！！」

掛け声とともに手に握ったゴミに力を籠める。

すると、「ゴミを木に変える能力」が発動し、手にあったそれは矢のような速度で、しかも三つ又に分れて別々の方向から相手へと襲い掛かる。

その速度、威力、間違いなくここ東京キングダムに来てから最高の一撃であった。

普通のオーク相手ならば、何をされたか気付く前に死んでいるだろう。

「……無駄です」

が、相手はただものではなかった。

七瀬舞と名乗ったその対魔忍がそつと手を前にかざすと、彼女の周りに無数の六角形の薄い緑に輝く物が覆いつくす。

分厚いコンクリートの壁ですら貫く樹木による刺突を、舞の周りに漂う厚さ一ミリもないそれがあっさりを受けとめた。

頭上後方側面、おおよそ隙がありそうな方向すべてから攻撃したつもりだが、どうやら効果がなさそうだ。

「お返しです」

そう言うとき彼女は彼女の体のいたる部分から、白く細長いものがうねうねと伸びてくる。

「……!!」

その白い鞭のようなものは一斉にこちらに襲いかかる。

そのヤバさを本能で理解し、何とか寸前で躲す事に成功する。

ふと自分が元いた場所を見ると自分の予感はずしかったらしい。

対魔忍から放たれた白いそれは地面や壁、果てには周りの野次馬オーク達まで、すべてをまるでバターのようになっさり貫いていった。

自分のチートボディなら、ただのナイフ程度なら貫通すらせず弾くことができるが、流星にあれは無理だ。

当たったら最後、血だるまにされてしまうのが目に見えている。

「といふかなんで自分を襲ってくるの!」

正直、今まで果実を細々と売ってただけで、対魔忍に狙われているようなことはしてないつもりなだけだ」

「黙りなさい。」

あなたが何と言いついししようと、すでにこちらでああなたが残酷な魔族だという証拠はつかんでいます。

大人しく私の忍術の餌食になりなさい」

残念！話が通じない！

「そもそも、自分が魔族だつていうことが間違いの人違いだ。

そもそもこのケモ耳だつてつけ耳のカチューシャだし？

ほらこの通り、外れるでしょ？」

「……!!まさかここまで偽装が上手い魔族がいるとは!!

ここで逃がすわけにはいきません」

自分が只の無罪の人間だと証明したつもりが、むしろ攻撃が激しくなった。

これはまずい。

このままでは交渉しきる前に殺されてしまう。

そもそも、今相手にしている対魔忍の強さがかなりガチだ。

この東京キングダムに来てしばらくたつが、ここまでまともに苦戦したのは初めてである。

いや、この世界に生まれて初めて生命の危機を感じているといったほうが正しいだろう。

だれだよ！対魔忍Ⅱアへ顔即墜ち2コマなんて言ったやつ!!俺だよ！

この謎の万能殺戮兵器を見て同じことが言えるのかよ!!

「確かに単純な物理攻撃が無意味だということとはわかった。

なら、熱と風の二重奏ならばどうかかな！」

ちよいと自分の別のチートを使い、懐から1本の武器を取り出す。

こんな時のために買って置いてよかった、米連製ロケットランチャー（1本5万3400円）!!



この汎用現代兵器から繰り出される爆発と熱風は、果たしてそのうすつぺらい防御壁ごとときでどうにかできるかな？

「その程度の熱量では、私の結界はひびもできません」

ですよね。

そもそもこの程度でどうにかできるなら、オークでも倒せるだろう。

やっぱり、米連製の安もんじゃあかんかったか。

「私の忍術、紙気は紙。」

だからといって、対魔粒子を吹き込んだ紙は、攻防自在にして変幻自在。

鉄壁の盾にもなれば破壊の兵器にもなります。

もちろんこの紙気の結界の前では、熱や酸、果てには炎さえも傷一つ付けることはできません。

逃げるだけ無駄です、おとなしく紙の染みになりなさい」

「ご丁寧にわざわざ能力を説明してくれるのは自信の表れか、はたまたは別の策略があるのか。

さて、状況を整理してみよう。

今自分が戦闘でまともに使える能力（制御できる意味で）は「ゴミを木に変える能力」だけ。

非戦闘系で今役に立ちそうなのは2つほどだがそれも別に直接相手を傷つけられるものではない。

身体能力は互角……いや、体の使い方的な意味でやや向こうの方が上。

こちらに向こうの紙気の守りを突破できるほどの威力のある攻撃方法はない。

「（あれ？これ、詰んでない？）」

何とか相手の攻撃自体は躲せ続けているが、それも時間の問題であろう。

身体能力がほぼ互角で、こちらに有効打が無ければ、粘っても向こうが勝つだけである。

「もう二度と対魔忍のことを奴隷娼婦予備軍って呼ばないから許して!!」

「殺します」

駄目らしい。

ならば仕方ない、せめて逃げ切れる程度には頑張るか。

それに既にこの状況を打開するために必要な分の情報は集め終わった。

口元に手を当て、舞の紙気カッターを躲しながら、静かにもう一つのチートを発動させるのであった。

「(厄介な相手ですね……)」

一方、キーを追い立てる側の対魔忍、七瀬舞。

その一方的な展開を繰り広げる反面、彼女は明らかに自分が苦戦していると感じていた。

「確かに、身体能力はほぼ互角で能力相性はこちらが有利。

しかも、明らかにあの魔族は戦闘行為そのものに慣れてない様子。

なれば、すぐに決着がついてもおかしくないのですが……)」

しかし、その舞の的確な分析に反し、未だ標的の魔族は一度も致命傷を受けていなかった。

理由はいくつもある。

例えば、相手が周りの人々を盾にするかのように逃げ回っていること。

標的の外見が人間のそれとほとんど変わらず、それに何故か対魔粒子による魔族的反応を感じできない事。

そもそも相手が逃げに徹しているなど様々な理由が挙げられた。

「(そもそも事前情報では、相手は植物操作の能力持ちだと聞いてましたが：：明らかに別の能力も複数所持してますね)」

そして、また目の前の魔族がその懐から質量保存の法則を無視して多数の火器をとり出し放ってくる。

それに合わせて、攻撃を一旦止め紙気による結界を再構築する。

銃弾の嵐が止み、離されてしまった距離を詰めるよう、舞は紙気手裏剣による牽制を放つが、まるでそれは先読みされたかのように躲されてしまった。

「(全く、面倒な任務です)」

以上の情報や状態を省みて、舞は今の自分の任務をそう評価した。確かに相手は只の力だけのボンクラ魔族とは一線を画すだろう。

慢心もしてなく、能力を複数所持しており、厄介なことこの上ない。でも、それだけだ。

相手は自分を倒せず、こちらは相手を一方的になぶることができ  
る。

これが純然たる事実だ。

「(おそらくこれは、相性の問題でしょうね。

私以外の防御力の低い同胞なら、案外苦戦してしまうかもしれません。  
ん。

なればこそ、確実にここで仕留めることにしましょう。)」

そう舞は決心し取り敢えず、見逃しだけはしないように勤めるのであった。

ん？元一般人とか言う相手側の訴え？

一般人が不思議能力を使うわけがないだろ！いい加減にしろ！！

「……ようやく、観念しましたか」

そして場面は移り変わり、そこは東京キングダム endpoint。

今は使われていないとある廃ビルに戦場は移っていた。

「ここなら、もうあなたが盾にできる民衆も逃げ道すらありません。

……今降参するなら、せめて苦痛もなく殺してあげますよ？」

舞がそう宣言するが、当然それは無視される。

「追い詰めた？

……ちがうね、こっちが誘導したんだよ！

【ゴミを木に変える能力】フルパワー！！」

標的の魔族がそう叫ぶと彼女の指の間から今まで以上の樹木による奔流が舞に向かって襲う。

その量、圧力はまさに津波のごとし、フロア全体を覆いつくすかのように樹木が成長し始めた。

「……はあ、この程度ですか」

が、それも結局無意味、舞の忍術の前にはあまりにもそれは無力であった。

範囲が広くとも威力を上げようとも、そもそも対魔粒子でコーティングされた紙気と、能力で生み出したとはいえただの樹木とでは強度の次元が違うのだ。

舞もここに誘い出されるかのように追跡させられたので、多少の罨は覚悟していた。

しかし、まさかこの程度のお粗末な考えだったとは、拍子抜けもいところだ。

「……でもまあ、それならそれでいいです。

そのまま、死んでしまいなさ……!!」

舞が結界を張りつつその隙間から相手に狙い打ちしようとした途端、突如頭上から強い衝撃が襲ってきた。

当然頭上も結界で守っているので傷つくことはなかったが、それでも今の衝撃は明らかに樹木によるそれとは違う。

思わず攻撃の手を止め。頭上を確認すると、そこには巨大な岩があった。

「建物の中なのに落石？

……!!いえ、これは!!」

そうして舞は気が付く。

樹木の濁流のあまりの振動と範囲の大きさによって気づかなかつたが、今この建物は轟音を上げて、大振動を起こしている。

先ほどの岩だけではない、大きささまざまな瓦礫やガラス片、廃材が自らに向かつて降り注いでくる！

まさかこれは……!!

「ま、まさか!!あなた、自爆して道連れにするつもりですか!!」

そう、今現在舞たちがいる廃ビルが現在進行形で崩れているのだ！おそらく、目の前にいる魔族がこのビルの中に誘い込んだのは、ここを倒壊させ、対魔忍である自分を瓦礫に埋もれさせ、紙気の結界ごと圧殺するつもりなのであろう。

確かにそれはいいアイデアかもしれない。

自分の紙気の結界は無敵の守りではあるが、その持続力という点では必ずしもそうではない。

対魔忍も人間である以上、術の維持には限界があるのと考えてるのは自然の流れであろう。

「(ですが甘いです、私の紙気による結界は耐圧はもちろん、持続力も抜群です。

おそらくは、私の結界が瞬発的なものだと思い、ビルの倒壊で圧殺するつもりでしょうが、それは無意味です。

安易な考えで自滅の道に走った、あなた自身の浅はかさを呪いなさい!!)」

そうして、舞とキーはその倒壊する廃ビルの中で完全に倒壊するまで、その中に残り続けたのであった。

「ふう、やっとおさまりましたか」

瓦礫に埋もれながらも、それを紙気の結界で自身の周りをすっぽり覆い、ビルの倒壊を耐えきった舞。

どうやらなかなかに大きいビルであったようで、結界の周りを瓦礫が埋め尽くしていた。

が、これくらいなら紙気結界を少し変形させれば、あっさりこの岩盤を突き破り、脱出することができるであろう。

それにおそらく自分の標的は、建物が完全に倒壊するぎりぎりまで、こちらへの攻撃の手を止めていなかった。

なれば、あいつは己の身すら守る暇なくこの建物の倒壊に巻き込まれたはずだ。

「……初めはどうなるかと思いましたが、終わってみればあつけないものですね」

そうして舞は自身の勝利を確信した。

そもそも対魔忍の中でも優れた腕を持つ自分が、あんな戦い慣れない魔族に負けるわけがないのだ。

なれば、あとはこのあの魔族の置き土産であるこの倒壊した建物から脱出するだけだ。

「やはり、瓦礫を押しつけて脱出するとなると、ドリルですかね？」

そんな風に対魔忍七瀬舞は、任務は完了したものとして、それよりもどのようにここから脱出するかに頭を働かせ始めるのであった。

……だから舞は気づかなかったのであろう。

彼女の足元に、不自然に1本の小さな木がコンクリートを突き破って生えていたという事実。

そして、さらにはその周囲に自分のものでない紙が複数枚無造作に落ちているという事実。

ちようきよう

そう、それは夢であった。

辛いよな、優しいよな、いやらしいよな

甘い、甘い、甘い。

痺れる四肢、ぼやける思考、うずく体幹。

私は私は……

……

「ごらっ!!いつまで寝てるんだ!!」

起きなさい!!」

ポカンという衝撃が頭に走る。

そしてようやくハッと目を覚ます。

「あれ?ここは……学校?」

「……七瀬、別に学校で寝てはいけないとは言わないわ。

けど、授業が始まったらすぐに起きなさい」

ふと、七瀬が微睡む思考を整え、眠い目をこすりながら周囲を見渡

すとそこは教室の中であった。

しかも、今まさに授業中らしく先生も生徒もみんなこちらを向いて  
いた。

「あつあれ?た、確か今私は東京キングダムで魔族討伐の任務中ので  
は……ぐっ!!」

霞みがかった頭で何とか今の状況を思い出そうとするが、その瞬間  
激痛が走る。

その痛みで、思わず整えようとした思考が強制的にストップさせら  
れてしまった。

……先ほどまでの激闘は夢だったのだろうか?



「七瀬、あなた寝すぎて頭痛を催すなんて、もう見習いは卒業してるの  
でしょう？」

対魔忍としても、いち五車学園生徒としても、体調管理には常に気を配って真面目に授業を受けてもらわなくては困るわよ？」

そんなことを考えている間に、本日の授業の担当教員であるアサギ先生がそう舞に注意をしてきた。

周りの同学たちも、自分が注意される様を見てクスクスと笑っていた。

「く、屈辱です……!!」

まさか、私が学業でこのような失態を犯すとは……!!」

対魔忍としても、学生としても優等生であろうと努めていた舞。

それゆえ彼女は今しがた自身が犯してしまった失態と周囲の生暖かい視線に思わず顔を赤くするのであった。

「と、取り敢えず訳はわかりませんが今は授業中みたいです。

ちゃんと授業には集中しましょう!!」

そう、今七瀬舞がいる場所は五車学園。

日本の辺境に存在し、限られた人しか知らない。

人類が魔に対抗するための最後の要塞の一つ、対魔忍たちの養成所にして拠点なのである。

そして、ここに所属する人々は皆対魔忍であり、未熟者や新前は生徒として日々修行に研磨し、熟練は教員や用務員として後輩を指導する。

そして、有事の際には生徒先生かわらず、皆実働対魔部隊へと早変わりする、それがこの五車学園の真の姿である!!

さて、そんなところに所属し、その教室の一室にいる七瀬は考える。  
……どうやらあの任務は自分の夢だったのだろう。

きつと、先ほどの違和感は東京キングダムでこなした任務のフラツシュバツクか何かだ。

そう自身を無理やり納得させた。

すると徐々に頭に鳴り響いていた頭痛も晴れてきた。

痛みが引き、先ほどまで机に上にのせていた上半身を起こし、背筋をピンとたてることができる。

顔を引き締め、きりつとした顔で周りのクラスメイト、及びアサギ教官を見つめ返した。

「…ふう、どうやらようやく七瀬もやる気が戻ってくれた様ね。

それじゃあ、授業を再開するわよ」

…よかった、どうやらまだ本格的に授業の内容自体は始まっていなかったようだ。

これなら授業内容を聞き逃すことはなさそうだ。

そう思い、ペンを手に取り、さっそく授業に集中しようとし…

「というわけで、今からやる授業は正しいおチンポ様の奉仕の仕方についてよ。

というわけで、教科書P53の「らめええええええ♡オークチンポすごいほおおお♡」を音読するわよ」

「いや！その授業内容はおかし…つて、んぎいいほおおお♡♡♡」

思わずあんまりな内容に、授業中にもかかわらず大声で突っ込みを入れてしまった。

が、その瞬間バールでかき乱されるかのような痛みが頭に走った。それと、感じたことのない甘い衝撃を内腹部にもだ。

「……はあ、またなの七瀬？」

今日のあなたは、ちよつと変よ？

そんなにまともに授業を受けたくないの？」

これは私が悪いの!?!今のは冗談とかじゃないの!?

鳴りやまない、激しい頭痛に思わず頭を抱えるながらそう苦悩する。

おかしいはずなのに、アサギ教員はむしろこちらを責めるような視線で見つめてきた。

「別に女遁や房中術は女対魔忍としては知識として聞くくらい、授業として普通でしょ」

「オークの危険性だってみんな知ってるはずだし……」

「もしかして、七瀬さん、オークとか奉仕とか聞いて、いやらしいこと想像しちゃったのかな？」

いや〜ね〜七瀬さん、顔に似合わずすつけく〜♪」

周りの生徒たちも自分を非難し、あざける声が聞こえてきた。

授業中思わず奇声を上げたこと、授業内容に訳のわからない突っ込みを入れたことを嘲笑されているのがありありとわかる。

……そうだ、むしろ何をおかしがっているんだ、私は。

私たち対魔忍が相手する敵はそういうやつらではないか。

「彼を知り己を知れば百戦殆うからず」

敵の魔族の生態について学ばずして、どうして魔を討つことができようか？

そう納得した瞬間、なぜかすつと頭から痛みが消え去た。

「……で、いいわね？七瀬、続けるわよ。」

「……っはいー問題ありません。」

授業進行を妨げてすいませんでした。」

思わず呆けていた態度を正した。  
そうして、授業が進んでいく。

「(それでも、やっぱり何かがある……何かがおかしい気もします)」

だが実際、授業が始まると何か違和感を感じる授業。

男性器のすばらしさから始まり、オークの精液の媚薬成分について。

どのように触れ、また扱えば射精へと持っていけるか。

その時、オークを何と呼び、どのように扱うべきか。

たしかに、確かに東京キングダムに娼婦として潜入し、身分を偽るときには役に立つであろう。

ここまで性と夜について詳しくければ、たとえオークと一晚情事に及んだとしても、まさか抱いてる相手が自らの怨敵だとは気づきはしないであろう。

周りの生徒も、なるほどといった顔でまじめに授業を聞いている。

そう、これは房中術の授業だからにもおかしいことはないはずなのだ。

ないはずなのに……

「(だめですね、今日はなぜか授業に集中できません。

それに、わずかな体温上昇と股間部の湿潤が……♡♡

この授業が終わったら、いったん保健室で休ませてもらいましょうか?)」

頭痛はなくなった代わりに、体の奥底からいやが応にも熱気を感じる。

紅くなる顔ともじもじと動く太もも、そして思わず又にも伸びそうになる自らの右手を七瀬は自覚していた。

自分以外にも同じような人はいないかと思わしてみたが、どうやら自分だけのようだ。

うつすらと感じる甘い匂いを鼻に受けながら、思わず自分の体の言いようのない恥辱を感じていた。

「それじゃあ、そろそろ実践してみるわよ。」

というわけで、本日この実習に協力してくれる特別教員を連れてきたわ。

さあ、入ってきて。」

「(え?)」

そうしている間に、アサギ先生は廊下から一人の巨漢を教室内に招き入れた。

それは身長が2メートルを優に超え、でっぷりとした体形をして、不細工な顔面に、鋭い犬歯が特徴的であった。

ここまで漂ってくる強烈な体臭にはこちらに嫌悪感しか思い浮かばせず、欲に溺れらいたらしい視線を隠そうともしない。

そして、あの皮膚の色に人ではありえない鋭い形の耳は、どう見てもオー……。

「(……っう!!)」

「この方は、今回お前たちがこの授業で学んだことを活かせるかの審査をしてもらうために来てもらった特別な御方だ。」

お前たちよりはるか上を行く特別来賓だ。

絶対に粗相のないように」

再びの頭痛。

既に何となく、突っ込みを入れたら頭痛が来るという法則は理解していた。

が、それでもこれには違和感を感じざる得ない。

確かにみんな、今尚真面目に授業を受けているし、先生も普通だ。だから、これは【普通の授業】のはずなのだ。

しかし、それでも自分の中の何かが警鐘を鳴らしているのだ。

「へあれは来賓、特別来賓だから、おかしくはない。でも、いけない、あれは危険、そんな気がする」

既に舞の心と頭はボロボロであった。

何が正しいか、何が悪いかの判断がごちゃごちゃになっている。

そんな自らの常識すら見失った彼女ができること。

それはただ一刻も早く授業が終わってくれることを祈るだけであつた。

「……じゃあ、どうせだから今回の実習は七瀬にやってもらおうかしら？」

授業が始まってても寝ていたくらいだから、体力が有り余ってるでしょう？

それじゃあ早速このお方にご奉仕なさい、性的にね」  
「なんでですかおおお!!!……いつつううううう!!!」

が、もちろんその願いはあつさりと裏切られた。

アサギ先生がこちらを名指しで指名してきたのだ。

無論、舞はいやであつた。

自分はまだ未通女であり、房術なんて今日の今この時までまともに知りはしなかつたのだ。

それなのにその初めてを、あのでかいだけの不細工に！

しかも先生と生徒たちみんなの前で、性的に奉仕をするなんて論外である！

「(無理、不可能、ありえません!!

!!  
そもそもやり方すらまともにわからないのに、生理的にもいやです

「ここは多少の無様をさらしても、辞退すべきです」

こうなったら最終手段、体調不良を盾にして保健室に今すぐ逃げ込もう。

さすがに対魔忍にも常識はある、体調が悪いといえば保健室で休むくらいは許してくれるだろう。

そう決心して、舞は手をあげ、こう宣言するのであった。

「はい！ぜひやらせてください！……って、え？」

自分は確かに、拒絶の言葉を言おうとしたはずだ。

それなのに自らの口から出たのはその逆の肯定の言葉であった。

「まあ、なんだかんだ言っただけで負けず嫌いなあなたならそう言ってくれ  
ると思っただわ。」

それじゃか、頼んだわよ」

「もちろん！まかせてください！」

……って、え？え？なんで？」

「まあ、七瀬さんならそういうよね〜♪」

「なんだかんだ言っただけで、やるときはやる娘だからね！」

アサギ先生や周囲の生徒はまるで、舞が事前にそういうのを知ったかのように対応する。

が、舞自身はまるで自分の意思を離れたかのように、自分の口から勝手に出たその言葉にただただ困惑するばかりである。

そして、口だけではない、その足も、手も！

なぜか、勝手に教卓へと、先生や同学に見守れながら、その来賓のほうへとなぜか自分から自然に近づいてしまったのであった。

「げっへっへー！」

お前が、あの噂の紙気使いの女かあ！

なかなかむさぼりがいのありそうなケツと胸をしてるじゃねえ

かあ！」

「……」

そして、舞はその来賓と向き合った。

その目は性欲にまみれ、口調も下心を隠そうとしない。

なによりその体臭もひどいものであり、もしこいつが来賓とやらでなかったらすでに殴り飛ばしていたかもしれない。

そして、おもわず、文句の一つでも行ってやろうと口を開けた。

「こらっ！まい、すでに実習は始まつてるのよ！

挨拶をしなさい！」

「……今回、ご奉仕させていただきます、対魔忍、七瀬舞です。

まだまだメスとして未熟ですが、このでかケツと大きいだけの乳には自信があります。

どうぞ存分に、私をオナニー用ティッシューパーとして使い捨ててください」

しかし、次に舞の口から出たのは聞いたこともないような下品な言葉と、最下層奴隷のごとき土下座であった。

自分の意志からは外れてしまったその四肢は、まるで地面とくっついてしまったかのようにピクリとも動かなかった。

その困惑するこちらをよそ目に、にやにやと来賓の男が笑い、こちらの頭の上にその足をのせた。

そしてそのまま、ぐりぐりと頭を踏みにじってきた。

おかしい、何かがおかしい。

なぜ自分がこんな奴に、こんなことをしなければならぬのか？

だが、いくら自分が反感を抱いても自分の体はうんともすんとも動かないのだが。

……そう、それに、この違和感はそれだけではない。

今、自分ほとんどない屈辱を受けている、そのはずなのに……



「いいわよ舞、流石万能優秀さは対魔忍中でも随一と言われているだけあるわ。」

「どの出しても恥ずかしくない、まるで本物の奴隷娼婦のような自己紹介だわ。」

むしろ、アサギ先生がこちらの行動をほめてくれた。

明らかにおかしいはずなのに、あのいつも厳しいと評判のアサギ教員がほめてくれた。

その事実だけで、なぜか今自分がしている行為が誇らしげに感じられた。

今の自分の行動が素晴らしいことを裏打ちするかのようになり、ふわふわとした充実感が自分の心に満ちる。

ああ、アサギ先生がほめてくれるなら、こうしてずっと■ークに頭を踏まれ続けるのも悪くはないかもしれない……？

「よし、なら次は、こちらの奉仕をしてもらおうか！」

貴様も、立派な対魔忍なら、できるはずだよな？」

さて、来賓様が一通り満足したのか、自分の頭から靴をどけてくれた。

やっと悪夢／幸福が終わる。

これでようやく自分は救われるのだ……

——ボロン♪

「……………え？」

「おお、なかなか積極的じゃねえか♪」

だが、違った。

なぜか自分がとっていた行動は、目の前の男のズボンを脱がせ、そのいつの男性器を露出させることであった。

「くくくく!!くさつ、くさつ、くさああああああ!!」

「ぐっふっふ!今日のために1週間チンコを洗わないでい続けたんだ!

感謝しろよ?」

その舞の目の前に出されたそれは、今まで感じたことのない強烈な刺激臭であった

酸っぱいやらしよっぱいやらの次元を超える。

まるで鼻に直接酢酸をぶち込まれるがごとき苦痛!

いや、それすらも生ぬるい。

なによりきついのは、恥垢にまみれ不浄の権化と化したそれから、なぜか視線を逸らすことができないことだ。

「…………え、え?う、うそでしょう?う、嘘だと言ってください…………!!」

強烈な悪臭にもかかわらず、むしろなぜかずんずんとそれに距離を詰めていく自分の顔。

猛烈な嫌な予感が舞の脳内に走るが、抵抗しようにも自分の体なのだ。

そして、とうとう目と鼻の先にそのそれが堂々と鎮座し……

——チュ♡

「ああああああ!!いやああああ!!

……つて、え?ああああああ♡♡♡なにこれええええ♡♡♡」

そして、恥垢まみれのチンコ相手に失われた自分のファーストキス。

それとともに感じる、強烈な嫌悪感とそれ以上の多幸感!!

吐き気を通り越して涙が出るほどの苦痛とそれを塗りつぶすほどの甘い衝撃が舞の全身を襲うのであった。

「(い、いやあああ!!もうやめ……

ああああああ♡♡♡♡なんで、なんで、気持ちいいのおおお♡♡♡♡)」

そのまま舞の口は、彼女の意思に反したまま目の前のそれに奉仕し続ける。

まるで愛しい人のキスを楽しみむかのように。

極上のデザートを少しずつ味わうかのように。

目の前のチンコをねぶり、なめ、こすり、ゆっくりとチンコからチンカスを味わい、なめとる。

顔のすべてを使ってオー■相手に奉仕をするのであった。

「(アサギ先生♡♡♡♡

助けてください!このままだと私は……私は……!!)」

壊れそうになる自我に言いようのない危機感を感じる。

しかし、チンコをほうばっているせいで、その口はしゃべることすらできない。

なのでせめてと、心の中ではアサギ先生に助けを求めた。

「いいわよー七瀬、さすが一流の対魔忍ね!

見ていてほればれするような、奉仕っぷりだわ」

「……え?」

が、アサギの口から放たれたのは、賞賛の言葉であった。

「すごいわ!七瀬さん、さすがね!

「あそこまで熱心な奉仕ができるなんて……まるで本物の奴隷娼婦みたいね!」

「いやいや、奴隷娼婦だったただではあそこまでやらないわよ?」

あれは愛ね、花嫁よ花嫁！ちんぽと結婚したがる、ド淫乱花嫁よ！」

そして、それはアサギ先生だけではない。  
クラスのみんなが。

劣等生から、優等生、ライバルと思っていた生徒まで。  
みんながみんな、自分のこの奉仕を認めてくれていた。

「ちがう！ちがうのおおおお♡♡♡♡♡

だめ、ほめないでええええ♡♡♡♡♡

このままじゃ、このままじゃ、戻れなくなっちゃううう♡♡♡

♡)」

自分の心が歓喜に震えている。

自分はおかしい、おかしいことをしているはずなのだ。

それなのに背筋が凍るかのような嫌悪感を感じながらも、それ以上に湧き上がる高揚感に溺れていた。

そう、目の前にあるチンポは汚く、臭く、最悪なもののはずなのに……

「げっへっへ!!」

そんな笑いながら、チンポにしゃぶりつくとは……

おまえ、とんでもない好きものだな？」

「えへへ……ふあい♡わたし、おチンポ様だいすきでふ♡」

自分の顔には、とろけた様な笑顔が浮かんでいた。

チンポをつかんだまま、笑顔でチンポに向かって頬ずりする。

心がポカポカし、今まで時折感じていた頭痛なんても微塵感じない。  
い。

自分の苦悩や常識が見る見るうちに溶けていくのがわかる。

チンポから与えられるすべてが素晴らしく感じられた。

目の前のオー／クが時々笑いながら、足で股間を刺激するが、それ

にすらただただ純粹な幸福しか感じなかった。

「それじゃあ、そろそろ出すぞ！」

顔で受け止めろ！」

「……はい♡♡」

既にチンコや恥垢に関する嫌悪感のみじんもなくなっていた。

その強烈だと思つてた悪臭は、むしろ体を興奮させる。

頭痛を消してくれる薬のようにすら感謝すらしていた。

なので、当然顔射してくれることに微塵の抵抗はなく……

「あああああああああああ  
!!!!!!  
♡♡♡♡♡♡」

顔に大量の精液がかけられる。

それだけで舞の体は達してしまった。

背筋がピンと伸び、口からだらしなく舌がベロンと飛び出す。

それでもその精液を絶対に無駄にするものかと、顔で、体で。

そして自身の対魔忍としての誇りであったはずの紙気すら使い、ま

るで乞食がごとく精液をその身に受け止め切ったのであった。

「えへ……えへへ……♡♡♡♡♡♡」

全身を覆う強烈なおいと粘液質。

舞の頭はすでにチンコと精液のことでは残ってなかった。

「流石、舞ね。」

オークのチンポ汁をほしいがために忍術を使うだなんて、なかなか  
できることではないわ」

「すごい！舞さん！まるで本物のチンポ狂いみたいだったよ！」

「つぶ、さすが七瀬だ、貴様こそがナンバーワン奴隷娼婦だ」

——パチパチ、パチパチパチ!!

周囲からの賞賛の嵐と拍手。

言葉の意味などすでにほとんど理解できないが、それでも自分が褒められている。

その達成感を感じ、存分に股間から潮を吹くのであった。

「それじゃあ、どうせだから、このまま七瀬さんに【本番】の見本もやつてもらいたいんだけど……いいかしら？」

「賛成、さんせ〜い!!」

「七瀬さんなら、きつと大丈夫だよ！」

「むしろ、舞にしかできないだろうな」

舞にはすでにまともな思考力などない。

しかし、それでもアサギ及び周りの生徒の言葉をうけ、全身にかかった精液を指でぬぐい、それをなめとりながら服を脱ぐ。

そして、その裸体をクラス全体にさらしながら、股を広げ、こう宣言した。

「はい♪オーク様、どうかこの哀れな舞の対魔忍負けマンコ。

その処女を、その立派なくっさいデカマラで屈服させてくださいませ♡♡」

七瀬舞は壊れたような笑い顔を浮かべたまま、自らの意思で目の前のオークにそう嘆願したのであった。

非現実な夢心地の中で……

.....

「……ま、実際に夢なんですけどね」

「そんなことはどうでもいい!!本番だ、あいつの、あの対魔忍の処女はいつもらつていいんだ!!」

「(そんな予定) ないです」

「ああああああああ!!!あんまりだああああああ!!!」

がち泣きする日雇いオークをしり目に、あの【紙気使い】の対魔忍の様子を眺めやる。

そこには、口、頭、股間などに無数の機械と触手につながられ、その豊満な体を跳ねさせる七瀬舞の姿があった。

こちらが機械のキーボードをポンとたたくと、その体がビクンと動く。

そして、別のキーをたたくと今度は『あん♡』という、嬌声を上げる。

「やっべ、今すっごく悪してる。」

今の私、すっごく悪のマッドサイエンティストだよ」

キーは自分がお邪悪な笑みを浮かべていることを自覚しつつ、片方の手の親指をなめながら、もう片手でキーを打ち続ける。

ふと横にあるスクリーンを見ると、そこには舞のしている夢……オークとのセックス風景(in五車学園教室)がその中には映っていた。

うん、察しのいい人なら既に気づいているとおもうが、改めて言う。

今こちらがしていることは【対魔忍】の洗脳調教だ。

方法はこの東京キングダムだと割とありふれている【魔界製・洗脳調教装置】による半生体機械によるものだ。

催淫ガスや簡易な肉体改造をしながら、エロい夢や知識、クチュク

チュを絶え間なく頭に打ち込むことでそいつを奴隷娼婦にするといった類のもので、実にお約束通りだ。

使い方？ 頭脳チートこと【親指かむかむ智慧もりもり（フィンタン・フイネガス）】でばっちりである。

この能力の効果は親指をなめている間、知覚拡大と推測力上昇させ、それによるなどの解明を行うといったもの。

これさえ使えば、ビルを自分だけまきこまず倒壊させる方法や、正しい魔界性調教機の操作法まで問題なく知ることができる。

しかも今なら、手で掬った水に回復効果をつけられるおまけ付きだ。

「……にしても、よくあんたこの対魔忍と戦って生きてたわねえ。

ビル一つ倒壊させるレベルって聞いたわよ？」

後ろの扉が開き、そこには掃除道具を持った狐耳魔族の女性が出た。

まあぶつちやけ、今回の調教の雑用のためにオークたちと一緒に雇ったいつもの娼館のノンケお姉さんだ。

掃除ができる安全な人材ということで雇ったけど、ぶつちやけお値段は不相応に高いです。

お揚げ割引がなければ絶対に雇わなかった。

「まあ、こつちにもいろいろ奥の手はあるからね」

そうやって、自分の手に持つ一枚の【折りたたまれた紙】を見せつけるかのように掲げた。

「……見たところ、普通の紙に見えるけど。

まあ、ここでぽっと見せるってことは何かあるんでしょうね」「というわけで、きつねうどんをどうぞ！

アツアツだよ！」



「……！」

そのまま取り出したアツアツ出来立てきつねうどんを狐耳娼婦のお姉さんにプレゼントしたのであった。

そう、これが自分の持つ3つ目の能力【スタンド・エニグマ】である。

スタンドとしては人一人殺せない位には非力だ、破壊力もスピードもEだ。

が、その能力の【対象を紙にして封印する】は強力にしてめっちゃ便利。

物質（及び植物）なら無条件で封印できるし、紙の中では時間の概念がなく、果物もいつまでも腐らせずに保存できる。

今ここにある洗脳調教装置みたいな大きな物から、炎や電気、果てには催淫ガスといった無形のものまで封印できるのだ。

まあ、ゴミを木に変える能力ほどではないが、この能力もここに来る前から日常生活でそれなりに使っていたため、今ではそれなりに使いこなせているつもりである。

……ただし、この能力の肝である【人を紙にする】方はまだまだ使いこなせる自信はない。

だって、自分みたいな一般人が、戦闘中に相手の恐怖のサインを見抜くとか、無理無理無理。

親しい人をじっくり観察して、その後指なめて察することが精一杯です。

「まあ、結局捕まえること自体は意外と簡単だったよ。

自分をまきこまないようにビルの倒壊させつつ、対魔忍を密室に閉じ込める。

そこにこっそり（地下から木で紙を運ばせて、それに紙に封印させていた）催淫ガスと催眠ガスで充満させる。

後は、ダブルガス攻撃で動けない対魔忍が瓦礫で押しつぶされていないことを祈りながら救出。

そんな流れだ」

「……いろいろ言いたいことはあるけど、よく対魔忍に効くレベルの催淫ガスなんて持ってたわね」

あのノマドのくそ魔族の場所で無料でたっぷり採取できたからな！

それに無数のエロ用調教道具も自分が初めて捕まった場所で、すべて回収済みだ。

ある意味では感謝するべきだけど、お礼はこぶしか鉛玉以外では支払うつもりはありません。

「それよりも聞きたいんだけど、なんでわざわざこの対魔忍を調教なんてめんどくさいことをしてるの？」

いや、もったいないのはわかるわよ？

でも、命を狙われたんだから、下手なことをするよりは殺したほうがすつきりすると思うわよ？

……まあ、そっちの趣味があるなら止めはしないけど」

「あるって言ったら？」

娼婦のお姉さんが無言でこちらから、距離をとる。

その反応は傷つくぞ、おい。

「まあ、さすがに冗談だから安心していいよ（興味がないとは言っていない）

でも、今回心当たりもないのに殺されかけたからさあ。

せめて、その理由を尋問できるくらいにはアツパラパーにしてやろうと思ってる」

「ああ、そういうことね。

……でも、あいつらが魔族を殺す理由なんて割と乗りと勢いよ？

わざわざ調べるほどのこと？」

調べるほどの事である。

正直、こちらら東京キングダムを脱走してさっさと実家に戻り、平和に暮らしたいだけなのである。

たしかに、ここ東京キングダムだけで話が終わるなら、ここでこの対魔忍を殺すなり、売るなりして、それで話は終わりだ。

しかし、もし仮にこいつらが自分のことを絶対に殺すレベルで狙ってたとする。

すると、それはここから脱走しても、それ以降ずっと狙われ続ける事を意味する。

つまりは東京キングダムから脱走しても、元の平穩を得ることができないかもしれないのだ。

だから、今回ここでこいつらがどの程度自分を狙っているか。

それはここを脱走したら解除される程度なのかをしつかりと知らる必要があるのだ。

そしてできるなら、自分を殺したと嘘の情報を持ち帰るくらいまで堕ちてくれればバツチリだ。

「こつちもいろいろあるんだよ。

いろいろ」

「……ふくん、まああんたが何を考えているかは知らないけど。

あんまりやりすぎると、またいらぬ恨みを買うわよ」

そういつて、狐耳の娼婦は、ガチへこみ中のオークを回収しつつ、この調教部屋から出て行った。

ふと自分が調教中の対魔忍をみやる。

【親指かむかむ智慧もりもり（フィンタン・フィネガス）】は判断材料が多いほど優れた回答を出せる関係で、目の前の対魔忍には、子供がゲームの説明書を読まないで遊ぶ感覚で調教を実装中だ。

薬用調教ナノマシン「イブ」をかすり傷一つ分で十分なのに、注射器一本分入れてみたり。

1本で後戻りできなくなるといわれる魔薬を3本ぶっさしてみた

り。

大丈夫大丈夫、いざとなったら回復薬頭からぶっかけてあげるから、どういう機序で回復するかはわからないけど。

正直今まで拾いに拾った調教道具すべてを使い尽くす勢いで、ひどいことをしているとという自覚はある。

が、それでも自分を殺そうとした奴に手加減するほど、こちとら甘くはないのだ。

「せめて、こいつがどうして自分を狙ったか。

その詳しい理由がわかればなあ」

「……ほう、ならば教えてやろうか？」

その瞬間、まるで背筋に電流が走ったかのような刺激が走る。

びりびりとした感触と猛烈なおぞ気を全身が支配をする。

嫌な予感を通り過ぎて、吐き気を感じつつ、この自分と対魔忍以外いないはずの室内で恐る恐る後方を振り返った。

「ふむ、貴様が噂の【水蜜】か。

思ったよりもいい顔をしているな。

……これは、なかなか面白そうではないか」

そこにいたのは黒いコートにそこそこいい体格。

若いというほどではないが、年寄りでもない男性。

一見人間のようにも見えるが、圧倒的威圧感と口元に見える牙のそれが人外だと知らせてくる。

なにより対魔忍と相対した時でさえ、なんとなりそうと思ったのにこいつ相手にはまるで効かなさそうだということが本能で察することができた。

この東京キングダムで、対魔忍よりも、普通の魔族よりも、すべて

が劣ってみえるほど強く感じる存在といえは……

「おっと、自己紹介がまだであったな。

私の名前はエドウィンブラック。

今回は君に少し話があつてね」

対魔忍世界最強にして最凶最悪の魔族。

産業複合体ノマドのトップであり古の吸血鬼がそこには存在していた。

「あ、あかん、これ死んだわ」

ていじゆう

「……で、仕事は完了したんだな」

「問題ありません。既に悪は滅しました」

ここは東京キングダムのある娼館。

ノマドの支配下であり、そこその大きさを持つ。

東京キングダムにある娼館としては、時に副作用のない媚薬と娼婦が元一般人や魔族が多めというで厄さが足りない温さが特徴。

しかし、それを補って、この店が持つノマドがバックについているというアドバンテージとそれとは別の安全性の高さはこの店の大きい長所である。

「流石、【紙気使い】。

ビルが倒壊して生死不明ときたが、どうやらそれは杞憂だったようだな」

そして、今このビルのオーナー室。

そこには【紙気使い】と恐れられる対魔忍とこの建物の支配人である魔族、この2人が同じ部屋で話し合っていたのであった。

魔を討つ者と魔そのもの、これらは本来交わるべきでないのは明白だ。

……しかし、悲しいかな。

別にこれは珍しいことではないのだ。

そもそも対魔忍は国の退魔組織ではあるが、それでもその情報網は虚弱の一言。

それゆえに彼らは蛇の道は蛇ということ、対魔忍は魔族の情報を得るために魔族内に内通者を作りその情報を得ているのであった。

そして、今七瀬舞が対峙している相手もそういう情報源の一人。

ノマド所属の娼館のオーナーでありながら、同時に魔族の動き、特にこの東京キングダムの最新情報及び倒すべき邪悪な魔族を対魔忍

に教えてくれる。

そういう対魔忍という組織にとってまさにこれというほどに都合のいい相手であったのだ。

色々おかしい気もするがこれがデフオなのが対魔忍と言う組織である。

「(……ま、もつとも今回の情報も真実ではないがね)」

まあ、当然その情報には裏があるのだが。

実はこの魔族の男は先日、キーの勧誘に失敗した魔族の男、その本人(本魔?)である。

そもそもこの魔族、淫魔の一族ゆえそこそこの美貌を誇るが、それも淫魔の中では少し首をかしげてしまう程度の貌の良さ。

さらに魔力や戦闘力も今一つなこの男がこの娼館のトップを務めているのは、この様に対魔忍と内通しているというこの1点のみなのである。

彼にとって都合の悪い相手を『邪悪な魔族』として対魔忍の情報網にリークすることで始末してもらう。

自分にとって都合のいい相手は『ほかの魔族のせい』と偽ってその凶刃からうまく逃れるように手配する。

そのように対魔忍を利用しきつたからこそ、彼はこのノマドで建物1つを任されるほどに成り上がることができたのだ

「(そうだ、俺はうまくやっている)」

そう、先日しかした魔族キーのスカウトの失敗は決して小さい失敗で済まされるものではない。

なぜか上から注目されていた彼女を確保できず、さらには以降の契約更新すらできなくなった。

このことが上にばれば、彼の順風満帆な経歴に傷がついてしまうことは確かである。

だからこそ彼は、彼女を殺すことに決めたのであった。  
彼女が不慮の事故で死んでしまえばそもそも話をなかつたことにできるからだ

「ところで、少しいいでしょうか？」

今回仕留めた魔族ですが、その後いくらかの情報や言動と照らし合わせたところ、あなたの言う情報と彼女の実態に齟齬があるようなのですが。

本当に彼女は、我々対魔忍を誘拐調教した凶悪な魔族なのですよね？」

……どうやら、今回は生意気にもこの対魔忍、自分が流した情報を疑っているようだ。

流した情報が嘘であることは確かだが、今回に限って疑われるとは。

魔族の男は死んでなお自分をいらだだせるキーにむかつきを感じつつ、用意してあつた保険をとりだす。

「ほれ、これが貴様が仕留めてくれた魔族が行つた数々の悪事だ。

写真や証言付きで貴様ら馬鹿な人間……いや、対魔忍にもわかりやすく書いてある。

わかつたら、さっさとそれを読んで帰るんだな」

無論、これらの書類は偽装書類である。

書いている証拠はどれもでたらめだし、証言も自分の部下からとつたでつち上げ。

そもそも今回キーが行つたとしている悪事は全部彼と彼の部下が行つたものだ

が、それでも彼は自分の嘘が対魔忍にばれるという心配は微塵もしてなかつた。

そもそも自分たちが提示した情報が嘘だと見抜けるくらいなら、そ



もそも対魔忍は自分たち魔族相手に魔族の情報を求めるといふあほな行為をしないはずである。

このガバガバすぎる対魔忍の情報収集能力は、おそらく戦闘力の高さゆえに慢心なのであろう。

さもあらん。

「……ふむ、どうやらこの書類を見た限り問題なさそうですね。

あの魔族キーが悪事を行った、その証拠がびっしりここに記載されています」

ほら、やっぱり気が付かなかった。

彼は知っている、我らのような対魔忍に内通している魔族がたとえ裏切ったとしても、その裏切りがばれることはめったにないことを。

仮にその裏切りがばれるときは、書類の偽装がばれた時ではない。

内通者自身が欲を出して相手の対魔忍を犯そうとした時ぐらいなものだ。

「わかったらさっさとその書類を持って帰れ。

私も忙しいのでな、これからやらなければならぬことが沢山ある」

そうして、その魔族が話を切り上げる。

席から腰を上げ、部屋から出て行くとした。

「……奇遇だな。

私もちよつとやらなきやいけないことがあるんだ」

……が、部屋の外に立っていたのは獣耳の生えた修羅であった。

「あひいいいいい♡♡♡植物チンポ♡♡♡触手チンポすごい  
ほおおお♡♡♡

お願い！お願い！！イカせてくらひやいいいいい♡♡♡♡♡♡♡♡♡♡  
言う通りに、命令通りにやりまひたから、ご褒美を、出させてくら  
ひやいいいいい♡♡♡♡♡

「あが、アガガガガ…！！  
タスケ、助けて…：ダズゲ…：デ…：！！」

やあ！皆さんご機嫌いかがかな？

先日対魔忍の調教中にラスボス系吸血鬼と遭遇した邪悪な魔族  
キー（非魔族・本名鈴谷清姫）だよ！

現在私は、元ノマド経営の娼館にお邪魔しています。  
用事？自分との約束を破った魔族さんへの仕返し。

件の魔族は魔界性寄生植物の植え付け実験台。  
協力してくれた対魔忍の七瀬舞ちゃんには先日エンシェイさんか  
らもらったエロ植物によるご褒美を実行中です。

「うわあ、【一般人の人身売買】に【魔薬の製作】

【魔界式調教道具の下取り】…：あんだ、なかなかにえげつないこと  
やってるわね。

「これからはちよつと付き合い方を考えたほうがいいかしら？」  
「あほ、自分がそんなことするわけないだろ」

いつもの狐耳の娼婦こと、天華さんが自分の冤罪偽装書類を見なが  
らそんなことを言ってきた。

今回の襲撃にはマツドな植物学者魔族のエンシェイさんに、いつの  
間にかすっかりマブダチ狐耳娼婦こと天華さんが同行してくれまし  
た。

襲撃そのものは完全調教しきった対魔忍七瀬舞1人いれば余裕ではあった。

が、今回は敵のボスを倒しても終わりではなく、書類整理や資産管理なんかもしなければならぬ。

なぜなら、今この建物の所有者は自分となってしまったからだ。

「へえ、なかなかいい物件じゃない。

部屋もたくさんあるし、地下も広く、別荘もありと。

ちようどよかったわ、私ももう一つ研究所がほしかったところだったのよ」

「にしても、あなた運がいいわねえ。

まさか、あのエドウィンブラックに出会って5体満足で生き残るだけではなく、お詫びに物件1つ丸俣もらえるなんて。

噂の恐るべき吸血鬼も意外と親切なところがあるんだねえ」

「……ソツスネ」

そう、前回いきなりあのエドウィンブラックが自分のところに乗り込んできたのはこれが原因だ。

ブラックさん曰く、今回自分が急に命を狙われたのはあのスカウト拒否した魔族が逆恨みして、そのまま対魔忍に暗殺依頼をしたからだそう。

だからそのお詫びとして、この建物とそいつの持っているもの全てをくれてやるとの話であった。

しかし、その受け取り方法は自力で乗り込み殺人してこい&受取拒否を認めないというもの。

お詫びとは名ばかりの、暗殺依頼及び不良在庫押し付け強盗みたいなものであった。

「で、結局自分の注目度はどの位だった？」

「取り敢えず、あなたが気付いているがどうかは知らないけど、いくらかノマドの方で貴方に監視が付いていたようね。

下手にゲートに向かったらあなたの本拠地まで追跡されてたん  
じゃないかしら？

幸いまだ貴方がどこ出身の魔族かまでは分かってないみたいだけ  
ど」

まじかー…あつぶねくなく…

対魔忍に速やかに襲われた時点で嫌な予感はしていたが、どうやら  
既にノマドは自分の監視を開始していたようだ。

もしこのまま、何も考えず実家に帰っていたらあつという間に実家  
ばれ。

そのまま家族が人質に取られ「たいまにんアサギ!!」されるところ  
であつた。

流星に転生チートな自分と違って今世の家族は一般人だ。

もし自分のせいで家族が酷い目にあつたら悔やむに悔やみきれな  
いところであつた。

幸い、まだ自分が元一般人のそもそも人間であることすらばれてな  
いようだ。

なお、ぶつちぎりで一番やばいやつ事ブラックさんには初見で人間  
だと見抜かれた模様。

ファツキン。

「取り敢えず今日から私もここに引越すわ。

今いる拠点は部屋数足りなくて、育てたい植物を育てられなかった  
のよ。

そう言うわけで、いくつか部屋を借りるつもりだからよろしく」

「あ、私も私も!!」

雇い料はいつもの分ときつねうどん一日一食でOKよ!」

運がいいやら悪いやら、どうやら今回付いてきてくれた魔族のご両  
人はここに居つくつもりようだ。

内心、この物件を売って何処かに雲隠れする作戦も考えていたがそ

れを取りやめることにした。

まあ、仮に物件売り払っておさらばしても既に監視がつくほどに注目されているっぽいので色々は無駄だろうが。

にしても監視があゝ、何で自分なんかの地味な八百屋が注目されたか微塵も検討つかない。

ぱっと思いつく今回の事態の解決法は①監視されても家族を人質に取られても大丈夫なほどの実力を持つ②元凶のエドウィンブラックをぶっ殺す③頼れる正義の対魔忍になんとかしてもらおう。と、どれも現実的でないものばかりだ。

特に③。

時間さえあればいくらでも金を貯めることはできる自信はあるが、それだけで解決できる段階は超えてしまっているのは明白だろう。

どうやら、自分の運命はあのエドウィンブラックに睨まれた時点である程度固まってしまったようだ。

とりあえず、当初の目的である東京キングダム脱出はいったん後に置いておく。

代わりに自分についてしまっている無数の監視注目とエドウエンブラックをなんとかするのを新たな目標にする。

で、それまでは仕方ないのでこの東京キングダムでしばらく定住することにしよう。

この清純派処女一般人である自分がこんな魔窟で悪意溢れるここ東京キングダムに馴染むとは思えないが。

「いゝくゝううううう♡♡♡ごわれるうううう♡♡♡」

植物赤ちゃんでイグウウウウ♡♡♡ 出産アクメぎめじやうのおおおおおお♡♡♡♡♡

「嫌だ！嫌だ！」

俺はこんなところで死にたくない！やめ……やめ……エボバツ!!」

そんなこと思いながら、後ろで体内に植え付けられた果実をゴロゴロしている対魔忍の少女と寄生植物がとうとう頭蓋内まで浸透し、そ

のまま頭を内側から破裂させられた魔族を眺めるのであった。

けいえい

(……実に面白い素材であった)

東京キングダムのあるとある高層ビルの一室。

そこで最強の一角と名高い吸血鬼、エドウィン・ブラックは噂の鮮果を眺めながら、一人思い出していた。

初めは単純な好奇心であった。

彼の部下、魔界騎士イングリットが食べていた新鮮な果物。

その異常な供給量と隠し切れない違和感から、なんとなくそれを部下に調べさせたのが事の発端であった。

彼の部下曰く、これはとある魔族が魔法によつて作ったとのことであるが、当然彼にとつてそれは嘘であると一発で分かった。

なぜなら、渡された魔法で作られたと言われたその果実には、一切の不純な魔力も対魔因子が含まれていない、純粋な【自然の植物】と一切の差がなかったからだ

それ故、彼は自分の好奇心と内心の期待（新しい強者もしくは自分の欲するもの）を求めて、直接その噂の【水蜜】とやらに直接会いに行つたのだが……

(……色々な意味で予想外であったな、できればもう少し熟している方がよかったが)

そこで彼が見つけたのは、何とも評価しがたい存在であった。

まずそれはただの【ただの人間】であった。

戦士のせの字も感じられない無謀さで、その歩き方や姿勢、血を流し馴れていない体臭。

戦闘狂である彼だからこそ、目の前の存在がまともな戦闘訓練など一回もしたことのないずぶの一般人であることなどすぐにお見通しであった。

……しかしこれは、それと同時に【最高の原石】にも見えた。

その体バランス、筋肉の付き方、さらには無数の見たこともない魔法とも忍術とも違う術の数々。

そして何よりも、おもむろに傀儡にしてやろうと、相手を支配する【彼自身の高位吸血鬼の血】をその無防備な背中に打ち込んだのに、なんと本人に気づかれもせず無効化させたのだ。

そう、まるでちよつとした細菌が白血球にすりつぶされるがごとく、吸血鬼の生きた血がただの人間の細胞如きにだ。

(……ふむ、一応軽く首輪はつけたが……どうなることか)

だからこそ彼は、それを手元に引き入れることにした。

自殺しないように最低限の地位と住処を与え、代わりに自分の支配下に置くことでここから逃げにくくした。

折角の原石なのだ、ぜひここ東京キングダムで存分に荒事に巻き込まれて、たくさんの戦闘を経験して立派な強者になってほしいものである。

「ま、それでも今はふうまの小僧とアサギが優先だな。

……駒は多いに越したことはないからな」

彼はそう呟くと、静かな笑みを浮かべながら、そのままアサギやふうまがいるはずであろう五車学園の方へを視線を移したのであった。

さて、皆さん久しぶり。

こちらはそのような経緯で最強最悪のラスボス系吸血鬼に目をつけられた転生TSなんちゃって魔族主人公です。

まあ、最悪の存在に唾をつけられるという最悪のデメリットはあったものの、ここ東京キングダムでちゃんとした拠点を手に入れるというのはそれなりの偉業を成し遂げたといっている。

ここ東京キングダムでは、毎日がヒヤッハーで世紀末。

道に迷えば、オークや薬中のレイパーが。

例え男相手でも濃厚なほもが、美女ならば言わずもがな。

そんな治安最悪な場所でノマドお墨付きの拠点を得るといえるのは、身の安全面という点ではかなりの大躍進。

さらに建物自体もそれなりに大きいため、じつくり腰を据えて研究



や訓練という意味でもかなり盤石！

そして、そんな拠点を手に入れて普通の一般人間である自分が次にすることは……!!

「は〜い！〜いらっしやいませ〜♪♪」

「こちら新装開店、健全風俗【水蜜亭】となっておりま〜す♥」

「今なら新装開店サービスで値段が半額！

嬢も依然と変わらない嬢が所属しております♪」

「あ♪そこのかっこいいお兄さん、うちに寄っていかない？

え？食事がまだ？うちなら、お腹も満たしながら、た〜っぷりサービスしてあげるわよ？」

なんと！依然と名前だけ変わって経営される大人の店の姿とその新オーナーになった偽魔族の姿が！

「このド変態」

「ちやうねん」

書類片手の天華さんから猛烈なジト目を受ける。

「だってさ、せつかくだからここも普通の八百屋に改築しようとしたんだよ？」

でもね、そうしたら、ここに元々雇われていた娘たちが猛烈に反発したんだもん。

【自分たちから仕事を奪う気か!!】【生きがいを返せ】とかさあ、それなのにそんな娘を全員放り出すとか……ねえ？」

一応、言い訳させてもらうと、自分だって当初はこの娼館を継続させるつもりはなかった。

当初の予定では、ここは要塞兼倉庫にして、もっと高ペースでの果物生産&出荷&新商品の研究。

それで金を稼いで、無数の袖の下やコネを用意する。

そして、機会を見て監視に目をつぶってもらい、ここを脱出！  
そんな予定であり、無駄な人員など雇うつもりなどなかったのだ。

「いや、ならそこは普通に追い出しなさいよ」

「どうみても、調教を受けただけのただの一般人もいるのにな？」

そんな娘をこの町の中に素っ裸で追い出すとか、冗談だろ」

でも、そうはいかなかった。

なぜなら、このもらった建物にはもともとここで雇われて生活している人や娼婦として生計を立てている人が多くいたからだ。

その数、魔族人間を含めるとざっと一〇〇人を超え、その中にはもともと拉致されて奴隷娼婦改造を受けた一般人やら、ここ以外居場所のない娼婦、薬中でアツパラパーになっているなど可哀想な人も多数含まれていた。

さて、もし自分が彼らの意向や将来を無視して、ここから東京キングダムで無一文で叩き出したらどうなる？

……悲惨な未来になることは容易に想像できるであろう。

「相変わらず、あんたは変なところで甘いわねえ。

知らない人間の一人や二人、ちやんと切り捨てなさいよ。

でないと、将来絶対碌な目に合わないわよ？」

「……ま、本当に面倒になったら放り投げるさ」

こういうところが、魔族である彼女と自分の違いなのだろう。

自分は確かに、先日魔族や外道に堕ちた人間を殺したし、助けを求め人間を無視した。

「それでも、助けられる状態ならば、できるだけ弱者を助けたいと思うんだ」

「……」

自称魔族を名乗っても、心まで魔族に落ちるつもりはない、これはそういう意思でもあった。

「だから、決して、決して、レズ娼婦の足ペロプレイが予想以上に気持ちよかったからじゃないよ。

ほんとだよ」

「やっぱリド変態じゃない!!」

「このあんぼんたん!!」

足ペロご奉仕プレイまではレズに入りらないと思います！

「で、結局その後がみがみと叱られたと。

それにしても同性愛とは、なかなか非生産的ねえ。

人間の娼婦相手に体を許すくらいなら、この子たちの方がずっと上手な上に純粹安全よ?」

「レズに落ちるつもりもないけど、さすがに植物プレイはもつとないわ」

ちよつとパワーアップしたエイシエンさんの実験所にて、ごつついご立派なチンポ型植物を渡されたが、それをそのまま投げ捨てる。

うわっ!!エロ催淫汁飛ばしてきた!!バッチ!!

「私としては、以前より立派な研究室を手に入れられたからいいんだけど、経営の方は大丈夫?」

元々の経営陣は大体私とあなたで殺し尽くしたはずでしょう?」

「なら、容赦なく研究費と称して金むしり取っていくのやめてくれませんかねえ?」

「必要経費よ、必要経費。」

新しい子(植物)を仕入れたから、その分今までとは別の肥料が必要なのよ。

将来的にはちゃんと還元するつもりだから、安心しなさい。

……もつとも、あの娘辺りはもう今の段階で満足みたいだけど」

「んううううううう」

新しいちくちく触手植物おチンポさまひゅごいのほおおおおお

♥♥

エイシエンさんが指さした先には、研究所の一角で魔界の淫植物相手に絶頂を決めている舞の姿がそこにはあった。

流石に、休憩時間中は何をしたいとは言ってるものの自分を殺しかけた対魔忍がああいう無様な恰好をさらしているといろいろと複雑な気持ちにならざる得ない。

「……ま、色々と不安はあるけどおそらく当分の間は大丈夫だと思うよ。

確かに自分がぶっ壊した分の建物修繕費やら安全面やら色々不安

はあるけど……

幸いなことに必要な人材はそろってるからな。

おそらく娼館として長続きはしないだろうけど、娼婦の娘たちが再就職先を見つけるまでのつなぎくらいなら何とかなるかなって」

とりあえず、エへ顔とろけ絶頂している対魔忍は無視しつつ、こちらの話を進める。

で、この娼館「水蜜亭」には幸か不幸か最低限の人材はそろっているのだ。

経営陣としてはチート洞察力がある自分と経験者かつ最低限の学はある天華さんが。

裏方にはエイシエンさんが、そして護衛兼用心棒としてはこのアへ顔無様ティッシュペーパーと化している対魔忍七瀬舞がいるのだ。

……ちよつと最後の人材にはいろいろと不安が感じられるが、そこは自分やオークの傭兵でカバーできるはずである。

一応、他との伝手不足など不安は感じられるが、そこはノマドというバックが裏にあるから無下にされないであろう。

新参としての、名前不足は自分の能力による果物格安サービスやこれまでの下積みでカバー。

そもそも元手ゼロ円八百屋として経営しているだけで黒字確定なのだ。

まあ、だからと言ってこんな付け焼刃経営ごときでうまくいくとは思ってないが、いい感じに軟着陸するくらいならできるのではないだろうか？

「そういうわけで、まあ多分どうなっても赤字になるってことはありえないから。

まあ、良くも悪くも経営素人ばかりだから、順風満帆にはいかないだろうけどね。

おそらくお客さんが激減りして、娼館の娘たちも少し飢えるかもしれないけど……

そこは適当に果物で飢えをしのいでもらって、適当な頃合で他の娼館に移籍してもらうさ」

「そういう問題じゃないんだけど……ま、今はいいわ」

「エイシエンの不吉な言葉を聞きつつ、休憩時間が終了してもなおチンポ中毒に陥っている七瀬舞を回収して、自分の業務へと戻っていくのだった。」

そうして、その不吉なセリフを聞いてから、はや一か月後。

そこにはすっかりさびれた【水蜜亭】……

ではなく、あまりの盛況っぷりに満員&忙しさに死にかけている経営陣の姿が!!

「すいませーんオーナー!!中級魔族が飛び入り団体でやってきました!!」

「予約無しなら無理だつて言っただろ!!追い出せ!」

「無理です!!私達には強すぎます!」

「オーナー!!社員食堂でレイプが!!」

「警備員のはずのオークはどうした!」

「そのオークがレイプの主犯です!」

しかも集団レイプです!」

「オーナー、無数の娼婦たちが移籍&保護を求めています」

「あほか!!今の状況とカオスっぷりでなお所属したいとか、馬鹿なの?死ぬの?」

「いや、こんなな場所代も上納金もさらに食事も安いんだから、そりや多少治安悪くても所属するでしょ。」

そもそも治安悪いのはどこも一緒だし」

「オーナー!うちが繁盛していることを聞きつけて強盗の鬼族が!!」

「はあああ!!!正面入口には七瀬が警備してるはずだろ!どうして突破されているんだ!!」

「あの娘が、チンポピンタに勝てるはずないでしょ!!」

今は強盗鬼のオナカテコ装備にされながら、オーナー室に向かってます!!」

「あのくそ馬鹿頭奴隷娼婦対魔忍があああ!!!」

こうして、忙しさに死にかけ、ゆつくりと【親指かむかむ智慧もりもり（フィンタン・フイネガス）】を発動させて、今の状況を冷静に分析してこういったのだ。

「よし、とりあえず、臥者へガチャ〜だ。」

臥者へガチャ〜しよう」

「それと、さぼり&脱走&レイプしまくりのオークも全員首にしましよう、そうしましよう」

とりあえず、忙しさのあまり死んだ目でオーク虐待をしようとしている天華を止め、ゆつくりと人材雇用のために動き始めることになった。

おつかい

さて、前回あまりの多忙とまさかの大繁盛という現実により、急遽臥者へガチャを執行せざるを得なくなったわけだ。

がしかし、この人材雇用という名の臥者へガチャ、ただただ人を雇えばいいという話ではない。

そもそも今回の雇用において、足りない人材の種類が多く、またそれなのにこちらが希望してない入社希望の人が多すぎるのだ。

で、まず整理しておく、今【水蜜亭】に足りていない人材は大まかに2つ。

一つは【手ごころな戦闘力を持つ部下】、もう一つは【忠誠心の高い秘書】この2つである。

まず一つ目の理由は言わずもがなであろう。

再三言っているが、ここ東京キングダムのは治安は率直に言うところである。

そのため、基本まともな店舗や建物のなら大なり小なり用心棒がいるのが常識となっている。

で、もちろん健全風俗【水蜜亭】（売春防止法及び危険物取扱違反）も当然のことながら、警備員やら用心棒やらを雇うのが筋という話である。

無論、自分を含めたこの4人は、チンピラはもちろんオークの集団、果てには鬼族や魔犬にも勝てるレベルの強者である。

エンシエイはその魔界植物で、天華は催眠術で、何より七瀬は対魔忍の中でもとくに有名なものは伊達ではないらしく、その戦闘力、応用力、防御力、範囲、すべてにおいて隙がないといえよう。

まあ、性欲がたまり過ぎるととたんにあれになるのは言わないお約束だが。

まあ、ともかくこの建物【個人戦力】という意味では悪くないのだが、いかんせん【総合戦力】となると話が変わってくる。

まず、第一に自分はオーナー兼果実生産者で、エンシエイさんは専属魔草研究員。

天華は娼婦をしつつ経営のサポート、何より七瀬は（対魔忍と敵対してないことのアピールのため）現役の対魔忍を続けているのだ。そうなるに常備の用心棒がオークだけというもう聞くだけでダメな布陣が出来上がる。

無論、懦弱、不義、粗暴の三拍子がそろったオークだけの護衛なんぞ、一般人にしか効果がない上にまともな上司が見張ってないときぼったり娼婦をレイプしてしまう。

となると、オークを警備させるときは自分や最低でも天華レベルと一緒に見張らせなければならぬわけだ。

そうになると、今度は経営やデスクワーカーが足りず……いわば負の連鎖が続く。

となると簡単だ、今自分が欲する人材は少なくともオークより強く、かつこんな新参偽魔族の自分でもあつさり言うことを聞いてくれる、そんな都合のいい存在。

「そう！というわけで、折角だから米連製のすつごく高性能で戦闘力もあるかつサポート機能ばっちりの【メイドロボ】くぅださい♪」

「そんな都合のいいものは存在しないし、仮にあったとしても君にそれを売ると思ukai?」

「ガツデム!!!」

こうして、自分の野望と希望はこうもあつさりと現実に砕かれてしまったとき☆

サイバーパンクでエロゲ（非R18あり）な対魔忍であっても、ないものくらいはある……そうつくづく実感させられましたとき。

「う〜、金さえあれば核兵器でもミサイルでも用意するって言うってたくせにい……」

「……まあ、戦闘もできるメイドとか改造人間ならあるにはあるよ。

でもそういうのは、すごく有能だけど中型娼館一つでは買えないか、君でも数人は買える値段だけど、おそらく君の望む強さの基準に



は達していないかのどちらかだね」

「完全ロボじゃないメイドロボは結構です。」

「……でも参考までに聞くけど、後者の強さはどれくらいなの?」「装備さえ整えれば武装オークのちよい上くらいはいけるかな?」

上位のオークや鬼には逆立ちしても勝てないけど」

「くそ雑魚じゃねえか」

「その診断基準はおかしい」

さて、現在自分たちがいるのは東京キングダムのとあるお洒落なバー。

そこで今自分と話している彼女こそ、八百屋時代から現在に至るまで何度か世話になっていた、武器商人「ヴィクトリア・ザハロフ」だ。「ま、だから今回はあきらめて普通の傭兵やらアンドロイドを雇うといいよ。」

ほら、これが今紹介できる人物リストだから」

「あ、うん、まあそれしかないかあ……」

そうして渡される用心棒&兵器ファイル。

そのファイルを流し見してみるも、どいつもこいつも今一ピンとこない。

まあ、ザハロフの紹介する人物であろうから、よっぽどの大ハズレや危険人物が渡されるということはないだろうが……。

「……ふむ、やっぱり不満があるのかい?」

「あーえ、い、いや〜そんなことないよ!!」

「……ごめん、普通に不満あるわ。というか、もうちよい金出せるからもう少し有能な奴紹介してくれない?」

だが、さすがにこのファイルに書いてある作業員(A)とか特殊部隊(女)は、どいつもこいつもあきらかな小物感が否めない。

強さも装備付けてやっとオーク以上なのに給料もオークの倍多いとかそんなのばかり。

コストの高いN(ノーマル)カードバランス型とか、どんな使い道があるってんだこん畜生。

「まったく、この【XPS―IIAボーン】持参の兵士とかなりの強さ

を誇るぞ？

これは米連が開発した強化外骨格試作機で、たくさんの戦場に駆り出されて、実績はかなりのものだ。

これで満足しないのはさすがに、贅沢じゃないか？」

「いやだよ、これ先日戦ったけど普通に自分の牽制攻撃だけでぶっ飛ばせるレベルのだからな。

あんなのじゃ、鬼はまだしも前にうちに来たふたなりレズレイパー相手には時間稼ぎにもならねえよ」

自分の返事が意外だったのか、一瞬彼女はきよとんとした顔をした後、数秒した後にくすくすと笑い始めたのであった。

いや、確かにいきなりふたなりレズとかいったら何言ってるんだと思うかもしれんが、マジでいるのだ。

両性具有魔族とやらで、マンもチンもついているくせに性的嗜好は女の子が大好きな奴。

先日うちの店に突然魔法付きで乗り込んできて、「オーナー堕とせばここの娼館の娘全員私のハーレムよね♪」とかわけわからんことを言いながら襲い掛かってきたのだ、性的な意味で。

一瞬、見た目はかわいい女の子だからありかと思っただが、さすがにスカートを押し上げている凶悪な一物の存在はNG。

死なない程度にぼこって、ケツに魔界ネギ突き刺して裏路地に転がしておいた。

今回のふたなり魔族は弱かったからセーフだったが、もしあれが強かったらと思うといろんな意味で背筋が寒くなる。

「ふふふ、突然笑ってすまないね。

……にしても、あのリリーナが最近やけにおとなしいなと思ったら……。

どうやら、あの紙使いの対魔忍を正面から倒したというのもまんざら嘘ではないみたいだね」

「……もしかして、知らなかったのか？」

普通に店前でときどき門番やらせているから結構有名だと思っただけだよねえ」

「いや、あの無様っぷりを見ると噂で聞く『紙使い』とあまりに違い過ぎて……。」

そっくりさんのただの奴隷娼婦かなって」

七瀬さん、可哀想。

いや、自業自得だろうから同情はしないし、解放するつもりもないが。

「でもまあ、確かにそういう意味では、このファイルに書いてあるのは君にとっては色々力不足なのは確かだね。」

……でも、これ以上の人材や武器を紹介するとなると、まだまだ無名の君では色々と厳しい、それもわかってもらえるかな?」

「……まー、そうなるよなあ」

まあ、彼女の言うこともわかる。

裏世界は基本信用第一である。

裏世界以上に法によるストッパーがない分だけ、裏切りで儲けを出すことは非常に容易である分、それをされたときは一気に大損害を被る。

それ故、大きな名前や強いバックがいるというのはそれだけで【信頼】や【いざ裏切られたときの保証】として大いに役立つ。

で、そういう意味では自分はいろんな意味で宙ぶらりんなのだ。

バックに地上最大手魔界の尖兵企業多国籍複合企業体【ノマド】はいるが、そこに正式に所属しているかというところというわけではない。

資産が足りているかと聞かれれば、固定収入や前オーナーの遺産はあるが、所詮は中堅小違法娼館のオーナーに過ぎない。

しかし、それでも自分は引くわけにはいかないのだ、社員の安全と自分の貞操のためにも。貞操のためにも!!!

「ま、それでも君が望むのならそれを用意する……それが私の役割だ」  
自分が引く気がないことを彼女は察したのだろう。

ザハロフはこちらに向けて、静かに一枚の茶封筒をよこしてきた。

「先日、とある傭兵に頼もうとした依頼なのだがね。」

ちようど運がいいのか悪いのか、先日彼はお亡くなりになってし

まったのだ。

だから、君がその依頼を受けるといい。

もしもうまくいけば、君が望むものが手に入れられるから」

そういうと彼女は静かに、席を後にしていったのであった。

にしてもまさかレイプなしで終わるとは、東京キングダムとは思えないな。

流石純愛エロしかない女、格が違った。

「で、その依頼って何？」

「条件付きの身柄の保護と研究成果の取り戻しだって」

かくして今現在自分たちがいるのは東京キングダムの外。

場所で言うとは栃木とか茨城辺りで、大型トラックでの移動である。

……一瞬このまますべてを捨てて自宅へ帰ろうとも考えたが流石にそれは自重した。

「分かりやすく言えば、今回の依頼はとある研究者が半分干されてる上に、命まで狙われ始めたから保護ついでに雇ってくれて話だ。

ついでに、もし保護してくれたら自分の研究成果やその副産物である兵器は自由にしていいよって話だ」

「それでわざわざわざわざこんなところまで来いってことは……」

つまり追手とか、追跡されている可能性もあるって事よね？

まったくめんどくさい」

「天華の姉御にオーナー！そんなことはどうでもいいんだ。

そいつは男か女か、それだけが問題なんだ」

「……非常に残念なことだが、そいつは女だ。

よかったなオークども、でも手を出したらマジでぶっ殺すぞ」

新しい社員候補が女であるだけで喜ぶオーク達、溜息を吐く自分と天華。

なお、現在のこのトラックに乗っているのは自分、天華、オーク（運転手）、オーク（お土産担当）という色々頭が痛くなる布陣。

エイファンさんは研究中をいいわけにお出かけ拒否されたし、舞は対魔忍のお仕事で欠勤、実に都合が悪い。

なお、このトラックは普通の道路も通っているがゆえ、ファンタジー生物であるオークは大丈夫かと不安がられるかもしれないが、ここは自分の「特殊メイク」で何とかした。

東京キングダムにはその手の変装させ屋が無数にあるが、そっちは高いから。

「にしても、わざわざ私たちに助けを求めらるって……

よっぽど切羽詰まってるか、もしくはほとんどもなく変人のどっちなのかしら」

「ん〜、どちらかといえば前者？」

どうやら、保護を求めていたのも脱走を上に察知されたせいらしくて、だいぶ時間が押しているっぽくてね。

さらにすでに保護先候補が1つ2つ潰された後だそうなの。

「!!!!」  
だから急いでも慎重に目的地へ……おい!!早く止めるこのオーク

影。  
そんな風に山中をトラックで走っていると、突然飛び出して来る人

急ブレーキをかける車両とつんのめり転げてパンツ丸見えになる  
天華、ガッツポーズするオーク。

そんなあほなオークとお怒りな天華を無視して自分は急いでトラックから駆け降り、件の飛び出してきた白衣の女性に足早に近づき  
こう述べた。

「大丈夫ですか？フレア・バレンス博士」

そう、彼女こそが世紀の天才博士、「フレア・バレンス」博士であり  
今回の護衛対象である。

「……そう、あなたが今回の依頼を受けてくれた人ね。

ま、30分前行動できなかつた点とこの天才を無駄に動かしたのは  
少々減点だけど、間に合ったから許してあげるわ」

そう言う彼女はそうそうに立ち上がり、急いで自分が戸を開けっ  
ぱなしにしたトラックへと乗り込んでいったのであった。

なお、狭いトラック内への眼鏡。ハツキン白衣美女のワイルドな乗り  
込みにオークたちのテンションは天井知らずだ。

「ちよつとちよつと、そんな急いであんたはいったいどうしたの！  
それより積み荷は！それとなんで待ち合わせ場所にいなかったの  
よ」

天華が男子高生もかくやといううるささを誇るオークたちに拳骨  
を浴びせながら、そう博士に尋ねる。

が、残念ながら、博士はそれに答ええないし、自分もなぜ彼女が急い  
でいるかなんて言わずともわかるというものだ。

「おい!!オーク達!!」

ここからさつさと車を発進させろ!!!

……でないと、死ぬぞ!!」

彼女に引き続き、素早くトラックに飛び乗り戸を閉め、運転手オ  
ークを叱咤する。

自分の言葉に、はつとした運転手のオークは急いでアクセルを入れ  
た。

直後、元々トラックがいた場所に強い光と衝撃、爆発が起きた。

オークや天華がその衝撃に悲鳴を上げるがそれは無視。

アクセルを離したらクロスときつちり助言を入れ、自分は窓から顔  
を出し件の襲撃者をきつちりと視認した。

「砲撃失敗、敵対組織との合流を確認。追跡プログラム起動。

これより追撃モードに移行します。速やかに敵戦力のせん滅及び  
証拠抹消を開始します」

後ろにいたのは鉄の翼、機械の手足に、ヘッドギア。

高速で空を駆け、こちらを殲滅せんと飛んでくる米連製女性アンド  
ロイド兵の姿がそこにはあったのであった。

れーす

現在、我々がいるのは関東北部のとある山中。

道は最低限しか舗装されておらず、本来なら慎重に走行せねばならない車道の一つトラックが全力で走っていた。

その中型トラックに乗るのは人外一人に科学者一人、2匹の豚猿、最後に荷台の屋上に一人。

なおこの車道はひどい荒道で走るたびにごつとんごつとん全力で揺れるが流石の天性の肉体、気合と根性でだけで踏ん張り立つができるのはいろんな意味で流石であろう。

無論、伊達や酔狂でこんな無駄に危険なことをしているのではない。

「ヒ——ハ——ッ!!!」

ポケットにしまっておいた「エニグマ」の紙から取り出すは、汎用機関銃2丁とそこから繰り出される7.62mmの嵐。

大人の指ほどもある重厚な金属の弾が高速で近距離から発射されるのだ、普通の人間であれば瀕死確定。

まともに食らえば熊を超え、オークや魔族でさえもただで済まないであろう。

「……無駄です」

……が、今自分たちを追ってきている者はそれ以上の存在であった。

まるで戦車に当たったかのようにあっさりとはじかれ、その移動スピードが衰えることすらない。

マガジンを2つほど空にして、足止めすらできていない有様であった。

「こなくそ!!これならどうだ!!」

銃撃が効かないなら、それ以外で!

素早く機銃を捨て代わりの武器として、右手には無数の手榴弾と火炎瓶を、左手には火炎放射器を装備する。

口を使って、無理やりピンを抜き34つつ同時に手榴弾と火炎瓶を

投げつけつつ、着弾と同時に火炎放射器であぶる。

おおよそ生身の生物にする対応でははない、少なくとも一体の生き物相手にする攻撃とは思えない爆発と熱風がその爆心地から上がったのであった。

パツと見かわされたようにも見えず、防御された様子すらない。

普通ならばそれだけで勝ちを確信し、生きているかの心配ではなく死体が残ってるか程度の心配しか出ないはずだ。

「……損傷軽微、追跡続行、チャージ完了。」

陽電磁ポジットロンキャノン、発射開始します」

「のぼぼぼぼ!!!」

が、残念ながら!こちらの全力火器攻撃ですら一切の効果は出なかったようだ。

むしろ、爆炎に包まれたままこちらに接近、さらには無数のビーム光撃をこちらに浴びせてきた。

幸いビーム自体は威力はそこまででもなく、発射する方の反射神経は並程度の様なので、躲したり防御が間に合うのが救いであろう。

「馬鹿ねえ、あの私を含めた米連に所属する天才達が協力して治したサイボーグ【A T T】が、そんなケンチな火器ごときでどうにかなると思ってるの?」

せめて、あれを倒すならミサイルの一つや2つもってきなさいよ、それでも多分外殻を少し焦がす程度だとは思うけど」

「見た目だけなら普通の人型じゃん!!素肌も眼球も見えてるじゃん!!なら、そこに当てさえすれば普通なら少しぐらい怯むと思うじゃん!!」

「はあ、あれの皮膚はほとんどが人工皮膚よ。」

見た目は普通の女の原型をしているけど、肉体のほとんどは機械化されているに決まってるじゃない。

あ、それより追加が来たわよ」

「んぎぎぎぎぎぎ!!!」

だったらわざわざ人型腹筋女性やや裸族ビジュアルにする意味は何だよ!という言葉はぐつと抑える。



そして、博士の言葉が言い終わるとともに周囲から無数の昆虫の形をした大型犬大ほどの機械群が飛び出してきた。

「【エニグマ】!!あの虫もどき共を紙にしろ!!」

……つて、んなっ!!効かねえ!!

あれら、ただの機械じゃないのかよ!!」

「へえ、よくわかったわねえ。」

あれら【ドローン・ワスプ】は米連の科学と魔界の技術の結晶のサイボーグスズメバチよ。

一応は生き物でもあるからそのところ気を付けてね」

【エニグマ】での紙化は生物相手だと、恐怖のサインがわからないと封印できない。

感心したようにうなずきながら言われた、全くうれしくない博士の助言を聞き流しながら、後方の追跡者サイボーグには催淫ガスと煙幕でごまかしつつ、ドローンには新しく取り出したライフルで対応していった。

幸いこちらの性能はある程度常識的なようで、機械蜂どもは羽の付け根に銃弾を叩き込むだけであっさりと破損、墜落してくれた。

「近接モードへ移行、強襲します」

が、そのドローンに対応している隙をついて、件の金髪サイボーグは一気にこちらへと突撃してきたのであった。

「えええ!!女性アンドロイドなのに、対魔忍にも有効な催淫ガスが効かない……だど!!」

「いや、あなた何あほなこと言ってるのよ。」

フィルター付き人工肺持ち相手なのにそんなのが効くわけないでしょう」

あたりまえだけど当たり前じゃない!!

ある種対魔忍世界、ひいてはブラックなりリス世界万能兵器である催淫&催眠ガスが無効化されてしまうという事実に驚愕する。

世界への叛逆的ともいえる出来事に焦っている間、目と鼻先までの距離まで接近を許してしまう。

が、当然文字通り全身機械の人型兵器に相手にまともに近接戦をす

るなど自殺とほぼ変わらない。

そのために全力で、この生きた殺人兵器を引きはがすために一つの奥の手を起動する。

「【ゴミを木に変える力】!! スペシャル!!」

手のひらのごみに全力で力を注ぎこみ、その数メートル先にいる相手に生きた木でできた濁流を浴びせる。

「無駄です。ビームソード起動……!?!」

とんできたサイボーグはその手のひらから、光でできた刃物を発生させ、その無数に発生した樹木を切ろうとした。

が、なぜか切れない。

本来ならこのような木材、ティツシユを指で突き破るよりも簡単に灼切できるはずなのに、まるで鉄を鋏を入れるかのように、最新裏技術の塊の刃はあっさり止められてしまったのであった。

「馬鹿め!! ただの植物と思った貴様が運の尽きよ!!」

ついでに、これでもくらえ!!」

「……!?! これは土砂……いえ、コンクリート!!」

離脱……失敗、これより防御モードに移行します」

その樹木は刃を止めつつ件のサイボーグの全身に絡みつく。

そのうえで同時にとっておき【総量200トンの生コンクリート】の入った紙をそのサイボーグ頭上で開放した。

どうやら、さすがにこの二重コンボには意表を突かれたのである。う。

よって、そのサイボーグは木と生コンまみれになり、墜落し、道路から転げ、玉となって坂の下へと落ちていき、自分達はその安否を確認しないままトラックに乗った状態でその場を後にするのであった。

「……で、どうしよっか」

「いや、どうしようもないでしょうこれは」

さて、いい感じにパツキン羽根つきサイボーグを撒いてから十数分。

ある程度追跡者から距離を離して、現在は山道を爆走&相談中である。

「一応ああ見えてあれ、改造しただけの人間なんでしよう？」

ならさすがにあんな風にコンクリートまみれにされたら生きていないと思うんだけど……」

「無駄よ。あれは潜水モードもあるから、1時間や2時間の無呼吸くらい何とでもなるわ。」

それよりも、私としては一瞬とはいえ、あれを足止め出来た貴方の手から出た樹木状のものの方が気になるのだけだ。

あれは何？魔界的な技術の一種？それとももつと別なもの？」

天華が希望的観測で尋ねてみたが、それはすぐに博士によって打ち砕かれてしまった。

そして、ピンチな状況であるはずなのになぜか元気な博士。

ノリノリでこちらに先ほどの戦略や見せた技術をぐいぐいと尋ねてきた。

「普通に魔界の植物だよ、特別丈夫なね。」

知り合いに植物博士がいましたね。

鉄より硬く、金よりも腐食しにくく、魔界でも高級建築材として評判らしいですよっ」と

ただし、本来は成長に数百年単位かかるらしいけどな！チート様様やで！

あの対魔忍強襲事件以降、力不足を感じたため、あらかじめエイシエンさんをお願いしておいたものの一つである。

日頃は催淫植物やらディルドーもどきばかり作っているように思えるが、本来はこう言うののために戦闘で使える樹木の研究をお願いし、そのために研究室や投資をしているのだ。

最近のエイシエンさんは舞同様植物オナニーにどっぷりだったの で色々と不安だったが、今回は実践では役立ってくれたようで何よりである。

「へえ……もう少し詳しい説明お願いできるかしら？」

さつきから頻繁に見せてくれる物質の取り寄せ能力も気になるし、

あ、それとあなたの肉体構造も気になるわねえ」

「そういうのは後で、とりあえずお互い無事に逃げ切れてからにしましよ。」

追加のお客さんも来てるようだし」

博士がずっとこちらに顔をさらに近寄せ、唇が付くかつかないか迄の距離まで近づいてきたがそれをそっと押し返す。

改めてトラックの窓から顔と腕を乗り出すと、遠方及び上空から無数のサイボーグ巨大蜂が見える。

どうやら、向こうは未だきちんところらを補足しており、みすみす見逃す気もないようだ。

改めて新しいロケットランチャーとライフルを取り出し、どちらも撃ち落としておく。

「ナイスショット」

「……で、だ。」

結局この追いかけっこいつまで続くんだ？

流石にあのドローンをつれて町中までいきたくないし、東京キングダムまでずっとこれ続けるのはさすがに無茶が過ぎるというものだぞ」

弾が入れた火器をしまいつつ、博士にこれからの展望を尋ねるも、その返答はこちらにとって望ましいものではなかった。

「残念ながら、このままだとそうなるわね。」

というかあの「ドローン・ワスプ」は現在より上位の警備システムと連動……わかりやすく言えば、あの追跡してきたアルカ・ステイエルこと「A-T-T」の命令シグナルで私たちを追跡しているの。

だから、あれを完全に沈黙及び機能停止に追い込まない限り、そこが尽きるまで、いやそこ尽きてなお追跡を続けると思うわ」

となると、自分たちはあのブリキ腹筋人形を何とかしなきゃいけないようだ。

あまりの困難に天華は頭を抱えつつ、オークはどうやって投降したらゆるしてもらえるかなんぞ相談し始めたが、それを無視しつつ博士に件のサイボーグの弱点を尋ねるも、返ってきたのはあまり意味のな

い言葉ばかりであった。

「え？明らかな弱点？そんなの残しておくわけないじゃない。」

最新式陽電磁リアクター、高性能ビームソードに陽電磁ポジトロンキヤノン、無数のセンサーに人工皮膚バリア機能人工筋肉対魔粒子装甲マジックジャマー。

そのうえ肉体の9割近くの兵器化と電脳化もおおよそ成功済みゆえ、魔術的洗脳や幻術は無意味だし、毒や環境変化もばっちり。

耐熱耐寒耐酸耐水耐電耐爆耐光 e t c e t c ……おおよそすべての攻撃に万能に対応できるわよ。

理論上真空下、宇宙空間での運用も可能なはずなのに明確な弱点が残っているとも？」

「おまえ、媚薬が効かないってうっそだろおい」

監獄な戦艦での伝統も無効とか、これももうわかんねえなあ。

「いや、そこを一番に警戒するべきでしょう。」

あなたは対魔忍でもあるまいし、何を言ってるの。

……まあ、一応は生体部位少しは残ってるから、ピンポイントで毒を浴びせれば効かないこともないわね。

いる？私特性の媚薬？とりあえず脳みそは電脳化しているとはいえ、生の部分も多かつたはずだから、直接脳内に注入すれば少しは効くんじやないかしら？」

「それは頭部装甲をかち割れなきや意味がないんですねわかります」

とりあえず、渡された特性媚薬とやらを紙にしつつそう答える。

なお、普通の生き物相手だと、塗ってよし嗅いでよし飲ませて良しの最高レベルの媚薬らしい。

リアルな感度3000倍を見て少しだけ感動したのは秘密だ。

「あとはそうねえ、一応いくつかの専用装置や端末さえ用意してくれば、あれの手足を制御している機構をジャミングすることはできるわ。」

それに適当な機械としかるべき場所さえ用意してくれば、1日と待たずにそれ用の装置をつくってあげられるわよ？

なんなら、私が直接触れられるのなら、手入力ですべての信号を止

めることもできるわ」

「……それは戦闘しながらでもそれは可能か？」

それならすごい楽なんだけど」

「なんで私が逃げてきたか、常識を考えて物事を言いなさい」

あきれ顔で博士に常識を問われる。

常識人は感度3000倍の薬を作らないんだよなあ。

「まあ、言いたいことはわかったよ。

ようするにあれを止めるのが、自分たちの仕事ってわけだ」

「そうそう、それが分かればいいのよ、分かれば。

私としてもさっさとあなたの能力やら米連の命令に縛られない研究がしたいんだから。

さっさとこの程度の窮地をどうにかしちゃって」

なぜが同じ逃亡者兼今回の逃亡せざる得ないことになった原因のくせに、なぜか尊大な態度を崩さないフレア博士をスルーして、こちららは間もなく追いついてくるであろうターミネーターちゃん（生）の対策を真剣に考える。

そうして、足りない情報で何とかするために親指がふやけるチートを使い考えに考えた結果。

「よし、今まで運転ご苦労だったなオークども。

ご褒美に、鉛弾をくれてやろう」

「ちよ、おまー！嘘だろ……」

んぎやああああああああ!!!」

トラックに銃声が2回、オークの汚い断末魔が2回響くこととなったのであった。